

---

# 真・恋姫†無双 英傑達と二人の魔王

Minosawa

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫†無双 英傑達と二人の魔王

### 【Nコード】

N0371X

### 【作者名】

M i n o s a w a

### 【あらすじ】

魔王シリーズ第2弾

心優しき魔王のミノルとその弟、『魔帝騎士団』の団長アキラが倉庫で見つけた銅鏡に触れた途端、2人は姿を消した。

2人がたどり着いた場所は三國志の英傑達が女という摩訶不思議な世界にいた！

いつの間にか二人は『天の遣い』と呼ばれる存在になっていて、2

人は剣を持ち、天下をかけた戦に身を投じる。

果たして2人の運命は？

バトルあり！笑いあり！

シリアスあり！ちよつとHな物語が今、幕を開ける！！

設定集 ミノル・アキラ編 (前書き)

少し訂正しました。それではどうぞ...

## 設定集 ミノル・アキラ編

### 設定集

ミノル

身長 177?

髪型 ショート

髪色 黒

年齢 20歳（外見年齢）

実年齢 12000歳

武器 魔剣・炎帝剣<sup>えんていけん</sup>

武器種類 中型剣『モデルは（ギルティギアシリーズ）ソルバツドガイの封炎剣』

通称 赤き戦人

魔物達が集う魔界の王、魔帝城の城主。

冷酷非情ではなく、心優しい人物で大臣から魔界の全ての種族から

信頼を受けていて、憧れの存在である。

性格は優しく、誠実。時にはユニークな性格を持つ。

戦場では魔界で弟アキラと並び、実力と指揮などトップクラスで剣などの様々な武器や他にも我流の武術など使いこなせる。

女性などの異性は普通だが、女性として自覚無しの行動や、積極的で大胆な女性はあまり好まない。

料理の腕前は魔界で弟アキラと同じくプロ並みで、勉学では名門大学並みの頭脳を持っている。

時にはキツイ毒舌を吐き、怒るとかなり怖い。

ボケ兼ツッコミ担当

アキラ

身長 176?

年齢 19歳（外見年齢）

実年齢 11000歳

髪型 ショート

髪色 金色

武器 魔剣・雷帝剣らいていけん

武器種類 中型サーベル『モデルは（ギルティギアシリーズ）カイ  
II キスクの封雷剣』

通称 白き戦人

魔界のトップクラスの騎士団『魔帝騎士団』の騎士団長で、魔界では王でもあるが、ミノルが政権を持っており、政治はミノル、戦いはアキラが指揮している。

性格は温厚で紳士だが、時には冷たい事も言う。

戦闘では武器の扱いのほかに軍師の力も発揮し、騎士団からの信頼も厚い。

兄ミノルを常に尊敬しており、よき理解者でもある。

兄と同じく、たまに毒舌を吐くことがたまにある。

異性に対しては紳士的だが、戦場では冷たくする。

少し照れ屋だが、怒るとミノル並にかなり怖い。

兄と同じく、積極的で大胆な女性はあまり好まない。

ツッコミ担当であるが、たまにボケでもある。

**設定集 ミノル・アキラ編 (後書き)**

コーウェンとシーナの設定は後日更新します。

## プロローグ(前書き)

ども…Minosawaです。

ついに始めてしまった…

でも後悔はない！

ダメなストーリーかもしれませんが…よろしくお願いします。

では…開幕！！

## プロローグ

さて皆さん、皆さんにとって『魔王』とは何でしょう？

RPGのボスで冷酷非情のイメージや、怪物で気持ちが悪いイメージがあると思います。

だがしかし…この物語の魔王は人間人間と同じく、時に優しく、時には厳しく、そして笑い合う、まるで人間のようなこの魔王ミノル、そしてその弟アキラ。

それでは！真・恋姫十無双 英傑達と二人の魔王 開演です！！

ここは魔界、様々な種族達が生活している異世界。その魔界の中心にそびえ立つ城、『魔帝城』

今日もその城内にある訓練場に何百人の兵士が鍛錬している。その横で少しクセのあるショートヘアで明るい金髪、白い鎧に似た服を着て、その腰には一本の長い剣がある。

???

「よし！今日の鍛錬は終了だ」

兵士全員

「……………」ありがとうございます！アキラ団長「……………」

そう…この金髪の青年こそ今作の主人公の一人、アキラである。

アキラ

「ふう…さてと…」

アキラは一息入れながら歩いていくと…アキラの前に黒髪で少し長めの髪型、黒い服を身に纏って、腰にはアキラの剣よりも少し短めだが、太さは、アキラよりも太い剣を持っていた。

???

「今、訓練終わったのか？」

アキラ

「兄さん！？何でここに？」

アキラの前にいるのが今作の主人公の一人であり、この魔界を統治している魔王で、アキラの兄ミノルである。

ミノル

「こつちも書き仕事も終わってな…お前の練習を見に来ただけだ…」

アキラ

「あちゃ〜ちょうど終わったんだ…そうだ!」  
アキラが何か閃いた。

アキラ

「久しぶりに歩く? 時間あるし…」

ミノル

「その案乗った」

そして二人は城内を歩きながら会話をしていた。周りの者たちは二人に一礼している。

アキラ

「そういえば…第六小隊隊長のヒューマが調理係のルービィと結婚するんだって…」

ミノル

「あの二人か…どつりで目が合うと頬を赤らめるはずだ…」

雑談話を歩きながらして二人はある場所に着いた

倉庫

ここはガラクタからとんでもないお宝？が眠っている場所であり広い場所である。

ミノル

「さてと…行くか？」

アキラ

「よし！行きましょう」

ミノルとアキラは塞いでいる物たちをどかして進んでいく。

すると…

アキラ

「ん？」

突然アキラがあるものを見て立ち止まった。

ミノル

「どうしたアキラ？」

アキラ

「兄さん…これって…」

アキラが手に取ったのは一枚の鏡だった。しかもかなり古い。

ミノル

「これは銅の鏡だ…何でこんなもんが」

アキラ

「誰かが置いて行ったのかな？」

二人が鏡を見て言うと突然鏡から光出した。

ミノル

「何だ！？光？」

アキラ

「眩しい…」

鏡の光がなくなると、二人の姿がなかった。

ミノル

「ん・・・」

アキラ

「うつ・・・」

二人は目を覚まし、起き上がった。

アキラ

「兄さん・・・」

ミノル

「ああ…俺達倉庫にいたはずだけど…」

二人が立っている場所はガラクタだらけの倉庫ではなく何も無い荒野だった。

二人

「「「うっ…どっっ…」」」



## プロローグ（後書き）

荒野のど真ん中に立っている二人。

そこに…定番のあいつ等が…

そして…二人は近くにある村に向かった。

次回『介入（現実）』

## 第一章 介入（現実）（前書き）

最初は『出会いと賊殲滅編』というものです。

サブタイトルの『現実』とは二人がやって来た世界の現実という意味です。

しばらくはこれに専念します。

みなさんよろしくお願いします。

## 第一章 介入 ー 現実 ー

### 第一章 介入 ー 現実 ー

荒野のど真ん中に立っているミノルとアキラ。

ミノル

「とにかく…こんな所においても仕方がない。とにかく歩こう」

アキラ

「そうだね…とにかく歩こう」

そう言つて二人が歩き出そうとすると、

????

「おい！てめえら！」

声が出たほうを振り向くと刃物を出している男三人がいた。当然二人は、

ミノル・アキラ

「誰??」

と、男三人に向かっていった。

????

「ぶざけんな！てめえら二人、めずらしい格好してんな？」

ミノル

「そうか？めずらしいか？」

アキラ

「いいえ…特に何も？」

???

「とにかくお前らの身に付けてるものを全部よこしやがれ！」

そう言つてこの三人のリーダー的な奴が短刀を二人に向けた。

????2

「アニキの刃物は切れ味抜群っすよ〜」

????3

「そうだぞ〜すごいんだぞ〜」

小さい男と太っている男がそう言っている。おそらく子分のようだ。

ミノル

「そんなおもちゃでか？」

アニキ

「何!？」

ミノルの一言に驚く男。もちろん弟子の二人も驚いている。だがアキラだけは呆れている。

アキラ

『また兄さんの悪い癖だよ…』

アニキ

「テメエ！ナメてんのか！？」

ミノル

「さっさと来いよ？」

アニキ

「このヤロー！ぶっ殺してやる！！」

そんなミノルの態度にキレたアニキがミノルを刺そうとするが、

ミノル

「やれやれ…」

ミノルがアニキの手首を握った。

アニキ

「イタたたっ！テメエ…」

アニキはあまりの痛さに短刀を放した。それを確認したミノルが短刀を持って、アニキを離れた。

ミノル

「使い方がなつてなければ、おもちゃ同然だよ」

そう言ってミノルは親指で短刀の刃を折り、アニキの前に投げ捨てた。それを見た賊三人は怯えていた。

ミノル

「今度はお前らの命を気持ちよく折ってやるつか？」

三人

「『ヒイヒイヒイ』めんなさーい！！！！」

笑いながらミノルがそう言うが、あまりの怖さに三人はもの凄い速さで逃げて行った。

ミノル

「何で逃げるんだ？冗談なのに……」

アキラ

「冗談に聞こえないって普通」

ミノルの言葉にアキラは呆れながら言った。

アキラ

「って言うか兄さん！さっきの奴らに近くに村があるかどうか聞かなかったの？」

ミノル

「あつ！ゴメン……」

ミノルは手を合わせてアキラに謝った。

アキラ

「はあくとかく歩こう」

ミノル  
「はい…」

ミノル  
「あっ！村だ！」

ミノルが指差した先には村があった。

アキラ  
「本当だ！！行こう」

く村く

ミノル

「これは…」

アキラ

「酷い…」

二人が見たものは村が所々ボロボロになっていて、血を出してぐったりしている人や半裸で泣いている女性、泣き叫んでいる子供がいる。

ミノル

「おい！何があつた！？」

村人A

「賊の奴らが…村の物を根こそぎ持って行きやがった…関係なく村

の奴らが無関係に殺しやがって…俺の妻や、子供までも…」

村人の言葉を黙って聞く二人。

アキラ

「生き残った人達は？」

村人A

「近くの酒場にいる…」

ミノル

「わかった…ありがとう」

二人は酒場に向かった。

〔村・酒場〕

二人は無言で酒場に入ると生き残った村人達が落胆していた。

村人B

「旅の者か…ここに来たってなにもねえよ…」

村人C

「この村のものはみんな奴らに持っていかれたよ…」

村人達がやけくその様に二人に言った。

ミノル

「んで…そいつらは何処にいる？」

村人D

「あんたらどうするんだ!!」

ミノル

「もちろん」

アキラ

「賊退治です!」

村人E

「正気か!」

村人F

「殺されるぞ!?!」

アキラ

「何もせずに殺されるよりもっとマシです!」

ミノル

「そういうこつた…それじゃ…」

二人がそう言っつて酒場に出ようとすると、村人が慌てて酒場にやっつて来た。

村人G

「大変だ!賊の奴らがまたやっつて来やがった!」

酒場の村人全員

「……何だつて!!!」

村人G

「もうすぐ来るぞ!」

アキラ

「行きましようか?兄さん」

ミノル

「そうだな…さて、いっちょ行きますか」

二人は自分の剣を持って酒場を出て、村の入り口に向かった。

## 第一章 介入 ～現実～（後書き）

今回は二人がこの時代で初めての賊との戦闘です。

ギルティなどの技を使います。

お気に入り、感想など大歓迎です。

『第二章 介入 ～雷炎～』お楽しみに！

## 第二章 介入 ～雷炎～（前書き）

第二章です…

いやー戦闘シーンは難しいです…

それではどうぞ…

## 第二章 介入 ～雷炎～

ミノルとアキラは村の入り口に立っていた。

ミノル

「あの砂塵か…数は？」

アキラ

「聞いたけど…200だつて」

ミノル

「最低ノルマは50だな」

アキラ

「相変わらずだね…兄さん」

入り口の前でのん気に話している二人。

賊一同

「『『『いやっほー』』』」

賊たちは走りながら叫んでいた。

賊1

「親分！入り口に誰かいますぜ？」

賊の一人が親分という賊の長に言った。

親分

「ああ？別にかまわねえ！やっちまえ！！」

賊一同

「「「「「おおおー！！！！！！」」」」」

ミノル

「来たぜ…心の準備はいいか？」

アキラ

「ああ！もちろん」

二人は武器を構えた。そして…賊に向かって走っていった。

二人

「うおおおおおー—————」

先制はミノルだった。

ミノル

「おらあ！」

賊一部

「うわああああ」「」「」

ミノルは一振りです、5人をぶつ飛ばした。

賊

「何だアイツは!？」

賊がミノルの行動に驚いている。

アキラ

「よそ見している暇はない！」

賊一部

「ギャアア」

その隙にアキラが賊を次々と切り倒している。

ミノル

「さすがは自慢の弟、いけてるねえ!!」

アキラ

「またオツサンみたいなこと言って!!」

そう言いながら二人は次々と賊を倒している。

賊

「何だこの二人、強すぎる!!」

親分

「だったら数で勝負しろ!!」

半ギレ状態で手下に命令する親分。

アキラ

「数で来るね…」

ミノル

「しびれを切らしたんだろう…」

お互い背中を合わせて言う二人。

賊一部

「『『死ねえー！』』』」

数十人の賊の部下が二人に襲ってきた。

ミノル

「封炎…」

アキラ

「封雷…」

二人

「『解放！』」

賊一部

「『『ウギヤアアー！』』』」

ミノルの周りから紅蓮の炎が、アキラの周りに蒼い雷が賊たちを吹き飛ばした。

賊一部

「何だ？何だ？」

親分

「何だあれは！？」

ミノルの剣が赤いオーラを、アキラの剣が青いオーラを纏っていた。

ミノル

「さあ、覚悟は…」

アキラ

「おありですか？」

二人の殺気に下がる賊達、だが…

親分

「そんなのハツタリだ！やっちまえ！」

賊一部

「「「「うおおー—————」」」」

親分の言葉に反応した奴らが、襲ってきた。

ミノル

「フン！」

賊一部

「ギャアアアア！」

ミノルの剣から炎が噴出し、賊たちをなぎ払った。倒れた賊たちは身体の所々焦げている。

アキラ

「遅い！！」

賊一部

「オギヤアアア!!」

アキラの剣から青い雷が発生し、早い連撃で次々と賊を倒している。  
気がつけばもう賊のボスしかいなかった。

ミノル

「はい、後はあんただけだ」

親分

「ぐぐぐ…貴様ら…」

アキラ

「観念しろ!」

親分

「うるせえ!これでもくらえ!!」

親分が手に持っていた棍棒で殴ってきた。だが、

ミノル

「せい!」

親分が振った棍棒をミノルは剣で軽々と止めた。

親分

「な…何だと…」

ミノル

「ぬるいな…やる気ある？」

親分

「調子に乗るなー！！」

親分は一旦ミノルから離れて、ミノルに向かって迫ってきた。

ミノル

「行くぜ…」

『シュツ』

ミノルが姿を消した。

親分

「どこにいやがる…」

ミノル

「ここだ…デカブツ」

ミノルは親分の懐にいた。

親分

「クソーーーーー」

ミノル

「いちいち！」

ミノルの左の拳が親分のみぞを殴った。



「炎と雷が出たぞー!!」

「賊は死んだぞー!!」

「俺達は助かったんだー!!」

そう言いながら村人が二人のもとにやって来た。

村長

「遣いだ！天の遣い様だ!!」

「「「「「「「「「「ははっ「「「「「「」

二人を前に何故か膝をついて、頭を下げています。

ミノル

「天の…遣い？」

アキラ

「どういう事でしょうか？」

村長

「ある占い師が言っていたんだ。『異界の彼方からこの戦乱に喘ぐこの世界を救う者現れる。』と」

ミノル

「異界の…」

アキラ

「彼方から…」

二人

『『それって俺「僕」達の事か—————!!』』

二人は心の中で叫んだ。間違いなく自分達だと…

翌日

昨日村では宴をやっていた。賊らしきアジトを見つけたミノルとア

キラはそれを鎮圧、盗まれたものは村の人たちに返したのだ。  
そして二人は賊が盗んだと思われる馬を連れる事にした。

村長

「遣い様：良いのですか？3日分の食料と水だけで？」

ミノル

「ああ…俺達は異界から来た者、まだこの世界の事はわからない」

アキラ

「僕達はそれを見るために、旅をしていきます。もちろん『天の遣い』は伏せてね」

村長

「何故です？」

ミノル

「俺達が『天の遣い』だと知ったら、色々な国々が俺達を自分達の物にするため動き出す」

アキラ

「そしたら…僕達がここに来た意味がなくなってしまうからです」

そう言ってミノルとアキラは馬に乗って、走っていった。

ミノル

「さようならー」

アキラ

「お元気でー」

二人は馬を操り、荒野を駆ける。彼らが向かうのは一体…

第二章 介入 ～雷炎～（後書き）

二人の存在が、国々を巡った。

次回 第三章 介入 ～轟く名～

お楽しみに!!

### 第三章 介入 ～轟く名々（前書き）

第三章完成～

世紀末雑魚さんの作品、クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ アツパ  
シ恋姫大決戦！～慶次もいるよ！～の内容を少し拝借しました。

それでは…どごぞぞ！

### 第三章 介入 く轟く名々

ミノルとアキラが賊達を一網打尽し、村から旅立った。

それから二人は、旅の道中に賊には何度も遭遇するが、二人はそれを撃退している。

そして二人の名は大陸中に響き渡った。

（劉備 side）

兵

「以上が送られてきた書になります」

とある城の一部屋にて

この部屋では劉備（桃香）、関羽（愛紗）、張飛（鈴々）、諸葛亮（朱里）、鳳統（雛里）、趙雲（星）が会議を行っていた。

公孫賛（白蓮）の下から桃香は独立して自らの理想“戦のない平和の世”の為、仲間と共に剣を振るう日々が続いていた。

そんなある日、袁紹（麗羽）から桃香宛てに尺牘が届いた。

その内容は簡単に説明すると“董卓（月）が悪い事をして洛陽の民が苦しんでいる。だからみんなでやつつけましょう”というものだ。

星

「どうされるかな、桃香殿」

桃香

「勿論参加するよ！ みんなを助けなきゃ！」

愛紗

「確かに洛陽の民を助けるのが我らの務めです」

鈴々

「みんなを助けるのだあー！」

星が質問すると、桃香はすぐさま参加の意を唱えた。

そして兄弟の盃を交わした愛紗、鈴々も桃香に賛成した。

しかし

朱里

「私は反対です」

雛里

「私もです」

星

「朱里と雛里に同じく」

朱里、雛里、星がそれを反対した。

愛紗

「何故だ！ 民が苦しんでいるんだぞ！」

朱里

「そこです、愛紗さん」

鈴々

「そこって どういう事なのだ？」

朱里

「考えてみてください。民が苦しんでいるならば我々の耳にも届く筈です」

雛里

「しかし、そのような情報や噂は一切耳にしておりません」

星

「私も一度洛陽に足を運んだがそのような街には見えなかった」

朱里

「それなのにこの尺牘には民が苦しんでいる　　はっきり言って信憑性がありません」

愛紗

「つまりは　　」

桃香

「この袁紹さんの嘘って事？」

朱里

「はい　　」

朱里らの言い分に冷静になる桃香。

愛紗もまた冷静になる。

鈴々は既に頭から煙が出ている。

朱里

「ですが決めるのは私達ではなく桃香様でしゅ  
噛んじゃった／＼／」  
はわわ／＼／

雛里

「あわわ  
」

肝心なところで噛む朱里。

桃香

「  
」

桃香は朱里の言葉を聞き、思い悩む。

そして出した答えは

桃香

「  
確かにこの尺牘は嘘かもしれない。だけでもしかしたら本  
当の事かもしれない。私はこれが本当かどうか自分の目で確かめた  
いの。だからこれには参加します」

参加であった。

愛紗

「わかりました。至急、隊の準備を致します」

鈴々

「にゃ？ 終わったのか？」

星

「ふっ　では私も準備をしましょう」

雛里

「あわわ　準備をしなきゃ」

朱里

「雛里ちゃん、兵糧の数は大丈夫かな？」

桃香の参加の言葉で各々の準備にとりかかろうとした。

桃香

「あ！　ちょっと待って」

しかし桃香が皆に待ったをかけた。

愛紗

「どうされました？」

桃香

「えっとね、例の件について聞きたいと思って」

愛紗

「例の件：『赤き戦人』と『白き戦人』の事ですか？」

桃香

「うん」

桃香は皆に『赤き戦人』と『白き戦人』について聞いた。

愛紗

「現在の情報だと洛陽に姿を見せているとの事」

桃香

「そっか　　なら尚更連合軍に参加しないとね」

朱里

「赤き戦人：腰にさしている剣は赤き炎を出し、白き戦人は赤き戦人の剣より長く、その剣から雷を出し数百の賊を二人で倒し、しかも賊から盗まれた品々を返しているという事で有名で街の人々から人気があります」

鈴々

「もしかしたら鈴々たちと一緒にかもしれないのだ！」

桃香

「うん！　だから　　必ず会わないと。そしてその人の意志を聞かないと！」

こうして桃香達はまだ見ぬ赤き戦人と白き戦人の出会いを楽しみにしていた。

↳孫策side↳

????

「私達はこの連合軍に参加するわ」

此処は孫呉の城。

城の部屋の一角にてある会議が行われていた。

その部屋には孫策（雪蓮）、孫権（蓮華）、周瑜（冥琳）、黄蓋（祭）、陸遜（穩）、甘寧（思春）、周泰（明命）が話し合っている。その内容は桃香達と一緒に連合軍に参加するか否か。

そして先ほどの発言により雪蓮達、孫呉は連合軍に参加するようだ。

冥琳

「よろしいのですか？」

雪蓮

「袁術のお嬢様が行けって言うんだから…行くしかないわよ…それに孫呉の名を轟かす機会でもあるし…」

蓮華

「姉さまの言う通りね…断ってもどの道…無理矢理にでも連れて行かせるもの…」

蓮華がため息混じりに言った。

雪蓮

「そつえば冥琳、例の…」

冥琳

「ああ…『赤き戦人』と『白き戦人』の件…今は洛陽に向かわれたみたいだ」

雪蓮

「洛陽　　か」

そう言って雪蓮は考え込む。

雪蓮

「その二人…男かな？」

『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』

部屋中の座っている人たちが全員ずッコケタ。

祭

「策殿…ご冗談を…」

雪蓮

「だつて…気になるじゃない！」

冥琳

「はあ…まったく…」

雪蓮達もまた、まだ見ぬ赤き戦人と白き戦人の出会いを（ある意味？）楽しみにしていた。

??????

????

「クソ！ 何故こんな事になった!？」

此処は劉備の国でなければ孫呉の国でもない。  
辺りは宇宙ともいえる漆黒に星々が照らす空間。  
そこには二人の男性が話し合っていた。  
先ほど叫んでいた男性の名は“左慈”

????

「落ち着いてください左慈」

そして左慈を落ち着かせようとしてる眼鏡の男性は“于吉”

左慈

「これが落ち着いていられるか于吉！！ 北郷とやらだけではなく意味のわからぬ二人まで外史の世界にやってきたのだぞ！」

于吉

「左慈の気持ちも充分承知しております。しかも更に悪い事が…」

左慈

「何だ！？」

于吉

「また二人…この外史の世界に来たようです」

左慈

「また二人って！どういう事だ！？」

于吉

「落ち着いてください…起こってしまった事はもう止められません」

左慈

「貴様 まさかこのまま放置しておくのか！？」

于吉

「ふっ 違います。起こってしまった事を“なかった”事にすればいい話です」

左慈

「つまりは外史で亡き者にすればいいと？」

于吉

「そうです。単純な話です」

左慈

「ふん！いいだろう…その案に乗ったぞ」

だがこの二人は後に知ることになる…赤き戦人と白き戦人とやって来た二人の怖さを…

一方、その頃あの二人はというと…

〔洛陽〕

アキラ

「兄さん…」

ミノル

「ああわかってる…」

二人は洛陽にいるが…その傍らには、

?????

「ワン！」

それは首に赤いバンダナをつけている犬だった。

二人

『『この犬の飼い主を探さないと…』』

二人は洛陽で犬の飼い主探しをしていた。



### 第三章 介入 〱 轟く名々 (後書き)

二人は何故犬の飼い主探しをしているのか？

そして二人があの子の名を聞いて驚愕します。

そして于吉が言っていた二人の正体が明らかに!？

次回 〱 介入 〱 驚愕〱 お楽しみに〱

## 第四章 介入 ～ 驚愕 ～ (前書き)

このサブタイトルの意味がわかる話です。

新キャラの正体とは？

## 第四章 介入 〱 驚愕 〱

どうして二人が犬と一緒にいるのかというところ…

〱 回想 〱

落葉に着いた二人は馬を預け、街を歩いていた。

アキラ

「そついえば兄さん、お金とか大丈夫？」

考えてみれば二人はこの世界の通貨すら持っていない。

ミノル

「ああ…前に村を襲った賊のアジトから少し拝借を…」

アキラ

「要するに盗ったのね…」

ミノル

「うん！」

アキラ

「はあ」

それを聞いたアキラはため息をついた。

ミノル

「とにかく何か食うか？」

そう言ってミノルは肉まんを買って、アキラに渡した。

すると…

???

「ワン！」

二人は鳴き声がした方を向くと、そこには首に赤いバンダナを巻いているコーギー？に似た犬が尻尾を振ってお座りしていた。

ミノル

「食べたいのかな？」

ミノルが犬に肉まんを見せると犬が尻尾を更に速く振った。

犬

「ワン！ワン！」

アキラ

「様子から見て間違いないね……」

ミノル

「ほら、お食べ」

ミノルがそう言って犬に肉まんをあげると、犬はもの凄いい勢いで肉まんを食べている。

ミノル

「か…可愛い！」

その姿を見たミノルはうつとりしていた。

アキラ

「とにかく行こう、兄さん」

ミノル

「ああそうだな…じゃあなワンちゃん」

二人はそう言って犬に別れをするのだが、

犬

「ワン！」

犬が二人のもとにやってきて、ミノルの足元で尻尾を振ってお座りをしている。

いわゆる『一緒にいて』の意味だろう。

アキラ

「兄さん…」

ミノル

「懐いちゃった、ハハハ…」

ミノルは犬を抱っこして、アキラがある事に気づいた。

アキラ

「あれ？この犬、バンダナでわからなかったけど、首輪がついてる」

ミノル

「マジで！」

アキラが指差している所を見るとバンダナに隠れて首輪が見えた。

ミノル

「飼い主とはぐれたのか…」

アキラ

「探しましょう」

そして今に至る。

アキラ

「手がかりは赤いバンダナだけ……」

ミノル

「うん、とにかく探すぞ！」

アキラ

「いませんね…」

ミノル

「ああ…町中探してもいないとは…」

二人は町中探しても飼い主が未だに見つからない。

二人は今、広場で休憩している。

アキラ

「まさか野良犬とかじゃあ?」

ミノル

「それはない。そのバンダナには汚れがほとんどない。って事は飼い主が毎日取り替えている証拠。この町にいるのは間違いないはず…」

二人が考え始めていたその時だった。

犬

「！！…ワン！ワン！」

突然犬が何か感じたのか走っていった。

その先には赤い髪色をしている少女が立っていた。

???

「……セキト！！」

犬

「ワン！」

犬は少女の胸に飛び込んで、尻尾を振っている。

???

「……心配した」

犬

「クウーン」

ミノル

「よかった…飼い主が見つかった」

アキラ

「そうですね」

すると少女が犬を抱っこして二人の前にやって来た。

???

「ありがとう…私は呂布…真名は…」

二人

「「え!?!」」

二人は少女の名前を聞いて驚いて耳を疑った。そして二人は後ろを向いた。

呂布

「?????」

アキラ

「兄さん!呂布ってあの三国志の!?!」

ミノル

「ああ…最強の猛将と言われるあの呂布だ。だけど男のはずだぞ!」

アキラ

「でもあの子女の子だよ!」

ミノル

「あっ!そうか…そういう事か」

ミノルはある事に気がついた。

ミノル

「考えてみれば、三国志には天の遣いなんて存在しないはずだ…」

アキラ

「って事は…」

ミノル

「俺の勘だけど…この三国志に出てくる武将全員美少女の可能性が高い…」

アキラ

「いわゆるパラレルワールドって事？」

ミノル

「そういう事だ…俺たちはちょっと変わった三国志の世界に来たって訳だ」

二人が会話していたその時、彼女が二人の腕を掴んだ。

???

「会わせたい人がいる…」

二人

「「えっ!!」」

彼女の言葉に耳を疑うミノルとアキラ。

呂布

「ついて来て…」

↳洛陽・王座の部屋↳

二人が連れてこられたのは王座の間だった。

ミノル

「り…呂布ちゃん？誰が俺たちを…」

?????

「私たちですよ…」

?????2

「ご無事だったのですね…」

二人が声がした方を振り向くとそこには二人の若い男と女がやって来た。男は白髪で少し筋肉質・緑色の服を着ていて、女は茶髪でスタイルが良く、青色の服を着ている。

ミノル

「誰？」

?????

「お忘れですか？」

アキラ

「まったく…」

?????2

「こつ言えばいいかしら？ミー様、アー様」

ミノル

「あっ！…まさか…」

アキラ

「その呼び方をするのはあの二人しかいない」

ミノル

「コ・ウェイ！」

アキラ

「シーナさん！」

第四章 介入 ー 驚愕 ー (後書き)

新オリキャラ、コーウェイ&シーナ参戦

二人の正体とは？

次回 介入 ー 経緯 ー

## 第五章 介入（経緯）（前書き）

今回はコーウェイとシーナの正体が明らかに、

そして…片想いもあるよ。

それでは…どつどつ！

## 第五章 介入 ー経緯ー

コーウェイ&シーナ参戦

ミノル

「な…何で？」

アキラ

「あなた方がここに？」

ミノルとアキラは驚きを隠せない。何故ならこの二人は魔界の魔帝城に仕えている大臣である。

ミノル

「何でお前らがここに？」

コーウェイ

「その前に、あなた方に会わせたい人が玉座に座っています」

アキラ

「会わせたい人？」

二人が見たのは、玉座の椅子に座っている少女がいた

その少女はまるで冷たく、悲しい目をしていた。

???

「は…はじめまして…私は董卓…」

二人

「えっ!?!」

董卓の名を聞いた二人は驚いた。

ミノル

「董卓ってあの!?!」

アキラ

「悪逆非道と呼ば…」

?????

「違う!?!」

アキラ

「えっ!?!」

アキラの喋っている途中に、董卓と名乗る少女の隣にいる眼鏡をかけた少女がアキラに怒鳴った。

?????

「月はそんな事する訳がない!?!ふざけた事を言わないで!?!」

そう言っつて少女はアキラの前に立ち、彼の胸倉を掴んだ。

董卓

「詠ちゃん!?!止めて」

???

「でも！」

ミノル

「嬢ちゃん！落ち着いて！！」

そう言っつてミノルは彼女を止めた。

ミノル

「俺の弟が無礼な事を言っつて申し訳がない」

そう言っつてミノルは彼女に頭を下げた。

その光景を見て内心驚くアキラ・コーウェイ・シーナ。無理もない、魔界の頂点にいる男が謝罪をしているのだ。

アキラ

「兄さん……」

そしてミノルは頭を上げ、眼鏡をかけている少女を見た。

ミノル

「ついでと言っつて悪いが、あなたの名は？」

賈馱

「ボクは賈馱<sup>かく</sup>」

張遼

「うちの名は張遼！董卓軍の客将や」

華雄

「私は華雄だ…」

呂布

「呂布…セキトの事ありがとう」

女性陣はそれぞれ自己紹介をした。

賈馱

「アンタ達は？」

アキラ

「僕はアキラ」

ミノル

「俺はミノル、アキラの兄だ」

二人は軽く自己紹介をした。するとコーウェイとシーナが二人の前に立った。

コーウェイ

「皆さん、ミノル様が『赤き戦人』で、」

シーナ

「アキラ様が『白き戦人』でございます」

一同

「……えっ!?」「……」

玉座の人間全員が驚いた。しかし、何故かミノルとアキラも驚いて

いる。

ミノル

「えっ？何その『赤き戦人』って？」

アキラ

「自分も『白き戦人』って意味が全く……」

コーウェイ

「おや、知らないのですか？」

シーナ

「もう大陸中に轟いている名でございますから」

シーナの言葉にため息をつく二人。

アキラ

「天の遣いではなく別の名で轟いているとは……」

ミノル

「予想外だった……」

賈馱

「それで、本当に炎と雷を出せるの？」

ミノル

「ああ……でも今は封印してるから……」

賈馱

「つまり戦う時にその封印を解く訳ね」

アキラ

「わかりやすく言えばそうです」

ミノルとアキラは簡単に説明した。

コーウエイ

「皆さん…もう遅いですし」

賈馱

「そうだね…解散!!」

ミノルとアキラ、そして董卓達の自己紹介はこうして終わった。

〈客室〉

そこにはミノルとアキラ、コーウェイとシーナがイスに座っていた。

ミノルとアキラは今までの事を二人に話した。

コーウェイ

「我々は…シーナと一緒に倉庫の整理をしていて」

シーナ

「いきなり目の前が真っ白になって、気がついたら玉座に…」

ミノル・アキラ

「……………」

二人はコーウェイとシーナの話の聞いているが何故かイライラしていた。

ミノル

「なあ…聞いていいか？」

コーウェイ

「何でしょっつ？」

ミノル

「多分…アキラと同じ事だと思っけど？」

アキラ

「うん…そうだよ…一つ言っでいいかな？」

シーナ

「はい？」

そして、ミノルとアキラは二人に指を指した。

ミノル・アキラ

「何で二人は若返ってんの!!!??？」

ミノル

「俺が知っているコーウェイは白いひげを生やした、頑固ジジイだったのに…」

アキラ

「シーナさんはそのコーウェイさんの奥さんで、苦勞人のおばあさんだったのに…」

二人の言葉に苦笑いのコーウェイとシーナ。

コーウェイ

「自分…頑固でしたかな？」

シーナ

「ええ…頑固の塊でした…でもそれも含めて私はあなたを愛しています」

コーウェイ

「シーナ…今の君は本当に綺麗だ」

シーナ

「あなた…」

二人『ミノル・アキラ』

「「あんだ等…」」

メロメロオーラを出している二人に、半ギレのミノルとアキラ。

二人『コーウェイ・シーナ』

「「すみません…」」

自重したコーウェイとシーナであった。

ミノル

「そう言えばお前ら、武器とかは？」

コーウェイ

「今は部屋ですが、双風剣が…」

シーナ

「私も今にはありませんが、小水剣が部屋に」

アキラ

「なるほど…」

どうやら二人も武器を持っているそうだ。

ミノル

「では…本題に入ろう」

辺りは一変、静かな感じになった。

コーウエイ

「今、董卓殿は民を苦しめる暴君として世間に広まっているらしい」

アキラ

「えっ！洛陽ではあんなに平和なのに？」

シーナ

「そう偽の噂だからです。そしてその暴君を倒さんとする連合軍が結成されたのこと」

ミノル

「なるほど…その偽の噂を流れたのは洛陽の外か…」

アキラ

「外？」

ミノル

「つまり、洛陽以外の国にその偽の噂などを流せば誰もが打倒董卓に旗を揚げるはずだ…自分の国の名を轟かすために」

アキラ

「そう言えば連合側の総大将は袁招でしたっけ？」

シーナ

「情報によれば、結構自分で、『袁家は名家』と自慢していると」

アキラ

「そしてその名を轟かせようとしている国は、蜀、魏、呉の三国」

ミノル

「そうだ…」

コーウェイ

「つまり…連合側に偽の噂を流した奴がいると…」

ミノル

「その可能性は大だ…」

三人

「……」

ミノルの言葉に無言の三人。

アキラ

「僕の提案だけ…」

アキラが挙手をした。

ミノル

「何だ？」

アキラ

「董卓軍に入る？」

三人

「……えっ???」「」

アキラの言葉に疑問の三人。

アキラ

「だって！彼女は悪くないし噂だけで、しかも嘘だらけの噂のために彼女が死ぬなんて…それに…」

コーウェイ

「それに…」

アキラ

「それに…あんな悲しい目をした彼女をほっとけないし…」

アキラは赤い顔をして言った。

ミノル

『あゝあいつ…董卓ちゃんの事…』

アキラの心中を察したミノルは立ち上がった。

ミノル

「俺も賛成だ」

アキラ

「兄さん!!」

ミノル

「確かに…あんな弱々しい彼女を見捨てる訳には行かないし、それに…」  
弟の初恋を兄として応援しないと？」

アキラ

「に！兄さん！？僕はそんな…」

ミノル

「違うのか？」

アキラ

「い…いや…好き…」

顔をたこのように真っ赤な顔をで視線を逸らすアキラ。

シーナ

「それじゃあ私たちも…」

コーウェイ

「参加しますか」

ミノル

「ああ！」

アキラ

「ありがとう…」

こうして四人は董卓軍に入ったのであった。



第五章 介入 へ経緯へ（後書き）

董卓軍に入ったミノル達。

虎牢関に連合軍が迫る！

董卓の言葉に怒鳴るアキラ。

そしてまたもや片想いもある？

次回 『介入 へ準備へ』 お楽しみにへ

第六章 介入（準備）（前書き）

今更ですが…OPとEDを決めました。

OP ALL-OUT ATTACK B・Z

ED 孤独のRunaway Mixture Style B・Z

ALL B・Zです！

## 第六章 介入（準備）

翌日、ミノル、アキラ、コーウェイ、シーナの四人は玉座の間に入った。

賈馭

「それじゃあ…ボク達の軍に入るんだね…」

ミノル

「ああ…そうだ」

賈馭の言葉に同意するミノル。

董卓

「ありがとうございます…私のために、こんな事に巻き込んでしまつて」

そう言つて彼女は四人に頭を下げた。

アキラ

「いいえ、とんでもない！僕達が決めた事ですから顔を上げてください」

賈馭

「まあ、赤い戦人と白き戦人が味方につけば心強いけど…」

ミノル

「けど？」

賈馱  
「うっん！なんでもない…もうすぐ作戦会議が始まるから少し待ってて？」

ミノル  
「わかった…」

そして張遼、華雄、呂布が玉座の間に集まり、作戦会議が始まった。

賈馱  
「連合軍が攻めてきているのは知ってるね？」

ミノル  
「ああ、知っている」

賈馱  
「一度はシ水関<sup>しすいかん</sup>で食い止めようとしたのだけど」

張遼  
「ウチらの猪突猛進を人物化した将が突貫したんよ。そんですぐさま陣形が崩れた」

華雄  
「馬鹿にされたのだ！許せる筈がない!!」

張遼  
「だから阿呆なんやで!!」

賈馱

「落ち着きなさい！今の言う通り、連合軍は着々と近づいてきているの。わかった？」

ミノル

「つまり…かなり劣勢って訳か」

アキラ

「華雄さん、そのシ水関を連合軍のどこの部隊が中心に攻めてきたんですか？」

華雄

「ああ…旗印は『劉』だったな」

コーウェイ

「劉備軍ですね…他は？」

華雄

「いや…『劉』の旗印だけだったな…」

シーナ

「曹操軍と孫策軍は？」

華雄

「後退していた」

アキラ

「後退した？何故」

ミノル

「どうせ兵を無駄に減らすのが嫌だったから、劉備軍だけで攻めさ

せたんだろっ」

張遼

「それと虎牢関攻めと何か関係があるんか？」

ミノル

「ああ…予測だが、たぶん前衛にその劉備軍が来る可能性がある」

賈馱

「シ水関で兵を消耗させたのに？」

ミノル

「まあ大方それぞれの軍から兵の数と兵糧を揃えて行くんだろっ  
と俺は思う」

賈馱

「なるほど…」

アキラ

「ちよっとその前に、董卓さんの意見を聞かないと…」

ミノル

「ああ…そうだな…」

アキラ

「董卓さん、君の考えを聞かせて欲しい」

董卓

「私は降伏をしようと思っています」

賈馱

「月?! やめて、降伏したって殺されるだけ!」

董卓

「それでも、みんなの命が助かるなら」

賈馱

「月は悪い事してないのよ! 何でそんな事しなきゃいけないの!」  
「?」

董卓

「詠ちゃん」

賈馱

「何だよ 何で」

董卓

「ごめんね、詠ちゃん」

賈馱は涙目になりながら董卓を説得しようとしたが

董卓

「私一人の為にみんなを苦しめちゃいけない。だから降伏するよ、詠ちゃん」

賈馱

「うう」

呂布

「

」

華雄

「クツ

私にもっと力があれば！」

張遼

「ホンマ憎たらしいで、連合軍」

董卓は既に降伏する考えでいた。

何も出来ない配下達は悔しい気持ちや悲しい気持ちになっていた。  
そこへ

アキラ

「董卓さん……」

董卓

「はい……」

アキラが董卓の前に立ち、自分の手を董卓の肩に乗せた。

アキラ

「何で無理してるの？」

董卓

「！？ む、無理なんてしてませんよ」

アキラの言葉に董卓は少し焦る感じで言い返した。

そして…ミノルはアキラの隣に来た。

ミノル

「いいや…アキラだけじゃない。俺やコーウェイ、シーナも無理して言っているようにしか聞こえなかったよ」

ミノルは真剣な眼差しで董卓に言った。

アキラ

「お願いだ董卓、『君主』の君の答えじゃない。『君自身』の…本  
当の事を言ってくれ」

アキラは悲しい目をしながら董卓に言った。

アキラ

「教えてくれ…君はどうしたいの？」

アキラが再び董卓に問いかける。  
しばらく沈黙が続いて

董卓

「私は」

アキラ・ミノル

「」

董卓

「私は                   みんなと一緒にいたい                   みんなと一緒に                   生  
きたい」

涙を流しながら答えた董卓。

アキラ

「それが君の答えかい？」

董卓

「はい」

コーウェイ

「それで…連合軍は今どこに？」

賈馱

「まだ情報が…」

と、そこへ

????

「失礼しますぞ?!」

帽子を被った少女が勢いよく王座の部屋に入ってきた。

賈馱

「ねね、動きは？」

????

「連合軍が見えてきたです！ もう少しで到着する筈です！」

賈馱

「モタモタしていらんないわね」

ミノル

「俺にいい案がある」

その一言で全員の視線がミノルに移る。

???

「何を言ってるやがるです！　というかお前誰ですか!?!」

ミノル

「俺はミノル」

アキラ

「僕はアキラ」

ミノル

「お嬢ちゃん、お名前は?」

陳宮

「あ、ねねは陳宮ちんきゆうです　　って何で和んでいるですか!?!」

呂布

「　　ねね、しるかい」

陳宮

「何ですとー?!?!」

陳宮は一人で騒いでいた。

賈馮

「いい案って？」

ミノル

「簡単な話だ…俺とアキラで虎牢関の前に立ち、連合軍を迎え撃つ」

賈馮

「大丈夫なの？」

ミノル

「心配ないって！なあ？アキラ」

アキラ

「はい！」

ミノル

「呂布と華雄と張遼は基本は待機、合図を出したら一気に攻めろ」

呂布

「………うん」

華雄

「わかった」

張遼

「その案乗ったで！」

ミノル

「コーウェイとシーナは彼女（董卓）の護衛だ」

コーウェイ

「わかりました」

シーナ

「全力でお守りいたします」

ミノル

「行くか！」

アキラ

「はい！」

董卓

「アキラさん！」

二人が部屋から出ようとする<sup>と</sup>董卓がアキラを呼び止めた。

アキラ

「はい？」

董卓

「私の真名<sup>まな</sup>は月です……」

アキラ

「えっ！？」

賈馱

「月！何で真名を……」

董卓の突然の行動に驚く賈馱。

董卓

「詠ちゃんもミノルさんに真名を教えたら？」

賈馱

「な！何で私が！しかもミノル限定！？」

すると董卓が小声で賈馱に耳打ちした。

董卓

『知ってるよ詠ちゃんがミノルさんの事気になってる事』

賈馱

「／／／！！」

董卓の言葉に顔を赤らめる賈馱。

アキラ

『なるほど…あの子兄さんの事…』

するとミノルが賈馱の前にやって来て、彼女の頭を撫でた。

ミノル

「かならず帰ってくる、約束する！」

賈馱

「……………うん…あと…これ！」

ミノル

「?????」

彼女が持っていたのは赤色と白色のお守りだった。

ミノル

「これは？」

賈馱

「月と一緒に作った手作りのお守りよ…白がアキラので、赤があんたのよ！」

見るからに赤色のお守りが白のお守りよりちょっと雑な出来だった。

ミノル

「ありがたく貰うよ」

アキラ

「ありがとうございます」

二人はお守りを首にかけた。

アキラ

「行ってくるね月ちゃん」

月

「はい！」

ミノル

「行って帰ってくるよ、詠」

詠

「気をつけて…」

ミノルとアキラは部屋を出た。

おまけ

シーナ

「あなた…」

コーウェイ

「ん？」

シーナ

「後でお赤飯炊きましょう」

コーウェイ

「そうだな……」

二人の将来が楽しみなシーナとコーウェイだった。

第六章 介入 ー準備ー（後書き）

虎牢関の前に立つミノルとアキラ、

打倒董卓の連合軍が二人の正体を知った時、それぞれの部隊の反応は？

連合軍の答えに彼らは決断した。

次回 『介入 ー真意ー』 お楽しみにー

第七章 介入 ～真意～（前書き）

完成しました…

いや～連チャンは辛い…

けどバリバリ行くぞ！

ではどっぞぞ！

## 第七章 介入 〱真意〱

〱虎牢関・連合軍side〱

袁紹

「おーっほっほっほ！ 全速前進ですわ！」

此処は難攻不落の虎牢関。

その門の前には総大将、袁紹が率いる連合軍の姿があった。そして現在、連合軍は会議を行っている。

曹操

「待ちなさいオバさん」

袁紹

「何ですかチビッ子？」

曹操

「今攻めたって軍は疲れきっているわ。此処は一旦整えてから攻めるべきよ金髪クルクルパー」

袁紹

「甘いですわね。今攻めなければ向こうも回復してしまいますわこの同性愛の性欲変態幼女」

互いの悪口を入れながら意見を言う二人。

劉備

「あ、あはは」

それを苦笑いをしながら見守っている劉備。

孫策

「やれやれ……」

目を瞑り、ため息をつく孫策。

?????

「またか」

溜め息をつき、どうすればいいか考える公孫賛。

?????

「七乃や、妾は飽きたぞよ」

?????

「我慢してくださいお嬢様」

もはや会議にも参加していない袁術と張勳。

????

「はあ」

曹操の様子に溜め息をつく一刀。

主にこの面子で会議が行われていたが、以上の通り、会議になっていなかった。

劉備

「と、とりあえず曹操さんの意見を聞きませんか？」

此処で劉備は曹操の意見に賛成する。

袁紹

「あら劉備さん、シ水関で猛将・華雄を撤退させてから少し生意気ではありませんか？」

劉備

「そ、そんな事はないですよ!」

袁紹

「まあ今回はチビっ子の意見を聞きましょう。わたくしは心が広いですからねえ。おーっほっほっほ!」

曹操

「そう　　なら私はもう行くわ。行くわよ一刀」

一刀

「え？　あ、ああ、わかった」

孫策

「終わったなら私も行かせて貰うわよ」

そう言つと同じ曹操と孫策は立ち上がり立ち去ろうとした。  
その時

????

「会議中失礼しますッ!!」

一人の伝令兵が慌てて入ってきた。

袁紹

「慌しいですね。何ですか?」

伝令兵

「こ、虎牢関より敵が現れました!!」

一同

「「「「!?!?」「」「」

その一言によりその場は緊張に包まれた。

袁紹

「あらあら、だからわたくしの言とおりにすればいいものを  
それでは進軍致しますわ！ 異論は認めませんわ！」

伝令兵

「で、ですが」

袁紹

「あら貴方、何かありませんか？」

伝令兵

「で、敵は二人なんです」

袁紹

「は？」

その言葉を聞いた瞬間、袁紹は間抜けな顔になっていた。

虎牢関・門前

ミノル

「結構な数だな」

アキラ

「そうだね」

一方の虎牢関の門前には一人の男が立っていた。

否、門前に“現れた”と言った方が合っているだろう。  
連合軍が様々な準備を行っていた時、門の上から現れたのだ。  
いきなりの男の登場に連合軍の兵士は動揺を隠しきれなかった。

アキラ

「はるばるこんな所に来て…」

ミノル

「何か用か？」

袁紹

「あなた方には関係ありませんわ！」

その男の問いに袁紹が答えた。

袁紹

「そもそも貴方は誰ですの！？ この名族、袁本初の前に現れたのですからそれ相応の覚悟は出来ているのでしょうか？」

アキラ

「兄さん…袁家って知ってる？」

ミノル

「全然、まったく、聞いた事もないな」

袁紹

「な！何ですって…！」

二人の言葉にキレル袁紹。

ミノル

「それより…その名家のあんたがこの連合軍の大將か？」

袁紹

「ええ、いかにも」

アキラ

「そうですね…ならあなたに聞きたい、この連合軍を作った意味は何ですか？」

袁紹

「そんなの決まっていますわ！ 洛陽を苦しめる暴君、董卓の討伐ですわ！」

暴君の言葉に少し怒りを覚える二人。

ミノル

「なるほど、よくわかった…じゃあ今度は劉備軍、曹操軍、孫策軍に問う！」

ミノルは真剣な目で言い放った。

ミノル

「あんたらがこの戦に参加した理由は何だ？まずは…劉備！言ってみろ」

ミノルは大声で劉備に言った。

劉備

「えっ！え〜っと、洛陽の民を苦しめている董卓を倒して民を助けるために来ました」

ミノル

「はいわかった…次は曹操！」

ミノルは曹操に向かって叫んだ。

曹操

「私も劉備と同じ意見で、自分の国の名を轟かせるためよ！」

ミノル

「次！孫策」

孫策

「私達は孫後の繁栄のために参加したわ…それだけ」

ミノル

「董卓討伐はついでか？」

孫策

「まあ…そつなるわね」

孫策の言葉にわかった様子のミノル。

袁紹

「話は終わりましたか？さあ！早くおどきなさい」

ミノル

「悪いね…俺ら二人はあんたらが言う悪逆非道の董卓軍の将だから…」

アキラ

「ここを通す訳にはいかない！」

袁紹

「おーっほっほっほ！まさか二人だけでこの大軍を止めるおつもりで？」

袁紹は高笑いして二人を馬鹿にした。

だが二人は…笑っていた。

アキラ

「ええ…そのまさかです」

そう言つて二人は剣を抜いた。

ミノル

「その高笑いを悲鳴に変えてやろうか？袁紹のクソババア！！」

ミノルが怒り混じりで袁紹に向かって言い放った。

袁紹

「何ですって!! 皆さん、あの命知らずの二人をやっつけておしま  
い!」

「「「ウオオオオオオオオオ!!」」」」

袁紹の号令により大軍が二人目掛け突貫した。

ミノル

「封炎…」

アキラ

「封雷…」

二人

「「解放!!」」

「「「ギャアアアアアアアアアア!!」」」」

突貫した兵の半数以上が吹っ飛んだ。連合軍はそれには驚きを隠せ  
なかつた。

ミノル

「命知らず？」

アキラ

「その言葉、そっくり返しましょう」

炎の剣を持つミノルと雷の剣を持ったアキラが立っていた。

袁紹

「な…！何者ですの!？」

ミノル

「そう言えば自己紹介まだだったな…」

アキラ

「この際名乗りましょう」

ミノル

「俺が赤き戦人 ミノル！」

アキラ

「僕が白き戦人 アキラ！」

二人は剣を袁紹に向けた。

ミノル

「俺が…」

アキラ

「僕達が…」

二人

「「天の遣いだ!」」

## 第七章 介入 ～真意～（後書き）

ついに始まる戦い。

二人の正体に驚く連合軍

様々な思惑とは裏腹に、二人はもう一つの作戦を考えていた。

はたして、その作戦とは？

連合軍は二人を倒す事が出来るのか？

次回 『介入 ～思惑～』

二人の作戦に、ある者は慌て、ある者は怒りを露にする。

ちょっとダブルオーの次回予告風にやりました…似てないか（笑）

お楽しみに～

## 第八章 介入 ～思惑～（前書き）

二人の思惑とは？

そして二人の作戦とは？

それでは、開演です！

## 第八章 介入 ～思惑～

劉備

「まさか…あの二人が…」

劉備は突然現れたミノルとアキラが赤き戦人と白き戦人で、天の遣いだとわかった途端、驚きを隠せない。

関羽

「よもや董卓軍の将で、敵となつて出会つとは」

張飛

「兵士が吹っ飛んだのだ！」

趙雲

「いやしかし、本当に剣から炎と雷が出ている…」

馬超

「妖術の類かな？」

劉備たちは二人の存在に驚いていた。

曹操

「一刀、あなたと同じ天の遣いだそうよ…」

一刀

「いや…俺の世界にはあんな剣見たことがない」

同じ天の遣いである北郷一刀も驚いていた。ましては二人が魔界から来たとは知る由もない。

曹操

「つまり…あなたとは違う世界から来たという事になるわね」

一刀

「ああ…そうなるな…」

今はそれしか言えない二人であった。

孫策

「あの二人が噂の戦人で天の遣いか…」

孫策は劉備ほど驚いてはいなかった。むしろ冷静である。

周瑜

「雪蓮、感心している場合は…」

軍師である周瑜が孫策に注意した。

孫権

「姉様！」

孫策

「わかってるわ…一旦待機、様子を見ましよう」

一方、洛陽では

コーウェイ

「住民の避難、完了しました」

月

「ありがとうございます」

コーウェイは洛陽のいる民を避難させた。

詠

「大丈夫かな…あの二人」

シーナ

「大丈夫です…あのお二人はお強いですから」

シーナは笑顔で答えた。

シーナ

「董卓様、お荷物の準備を…」

月

「はい！」

シーナは笑顔で返した。

ミノル

「おつりやぁ！」

「「「「「ギヤアアアアアアアアアア！」」「」「」「」

ミノルは突貫した残りの袁紹軍の兵士をなぎ倒している。

アキラ

「そこだ！」

「「「「「グアアアアアアアアアア！」」「」「」「」

アキラも素早い動きで敵を倒している。

「「「「「くらえー！ー！ー！ー！」」「」「」

アキラの背後から兵士三人が襲ってくるが、

ミノル

「おら！」

「「「「「ぶは！ー！ー！ー！」」「」

ミノルがその三人を殴り飛ばした。

アキラ

「ありがとう！兄さん」

ミノル

「残りは逃げたか…」

二人の周りには倒れている兵士だらけだった。しかも…

兵士

「何だこれ！？気絶してる…死んでる奴なんか一人もいねえ」

兵士は膝をつきながら驚いていた。そう二人は兵士達を峰打ちで倒している。そのためか二人には血の一滴すら浴びていない。

ミノル

「あっ！まだいた…」

兵士

「ヒィ！」

ミノルがそう言うと兵士がびびった。

アキラ

「兄さん…戦闘の意志はないみたい」

ミノル

「じゃあさっさと帰りな」

兵士

「ウアアアアア…」

男は武器を捨て、去って行った。

ミノル

「袁紹がいる陣に行きたいけど…」

アキラ

「劉備軍、曹操軍、孫策軍の防衛網を突破しないと…」

そう袁紹がいるのはあの三つの軍を突破しなければならない。

ミノル

「合図を出すのはまだ早い、戦力はなるべく温存しないと…」

アキラ

「そうなるよ…最低一つの軍でも落とさないと…」

ミノル

「アキラ…こうなればアノ作戦やるぞ…」

アキラ

「わかった!」

果たしてその作戦とは？

一方その頃

劉備 side

劉備

「片付けちゃった」

関羽

「あの大軍を二人だけで…」

張飛

「凄いのだ!」

三人は二人の戦いぶりに驚き、感動していた。

趙雲

「愛紗、感動している場合か?」

関羽

「そつだな! 翠、桃香様を頼む!」

馬超

「わかった!!」

張飛

「よし!行くのだ!」

劉備

「待ってみんな!」

突然、劉備が皆を止めた。

関羽

「桃香様、何故?」

劉備

「何かあの二人、何か言ってる…」

関羽・張飛・趙雲・翠

「「「「えっ!!!」」」」

曹操 side

曹操

「春蘭、秋蘭」

二人

「はっ！」

曹操

「貴方達は季衣、流琉、凧、真桜、沙和を連れて…」

一刀

「待つて華琳！」

曹操が言っている途中、一刀がそれを止めた。

夏侯惇

「貴様！華琳さまがまだ…」

夏侯淵

「姉者、ひとまず落ち着いたらどうだ？」

夏侯惇

「しかし！」

曹操

「春蘭、お黙りなさい…」

夏侯惇

「華琳さま……」

曹操は夏侯惇を黙らせた。

曹操

「それで……一刀、何かしら？」

一刀

「あの二人……なんか言っていないか？」

曹操

「えっ？」

孫策 side

孫策

「冥琳！」

周瑜

「ええ……祭と思春、明命はいつでも……」

孫権

「私も行くわ！姉様」

周瑜

「蓮華様！」

孫策と同じ鮮やかなピンク色のロングヘアで褐色肌の少女、孫策の妹・孫権が剣を持って申し出た。

孫策

「いいわ…でも、無理はしないでね」

孫権

「はい…」

陸遜

「ですが此方の兵が少なくなるのが嫌ですね」

孫策

「それでもいいわ…ん？」

周瑜

「どつした？雪蓮」

孫策

「何か…あの二人、話してる？」

二人はついに、三軍がいる近くにやって来た。

ミノル

「どうする？左に劉備軍、真ん中は曹操軍、右には孫策軍がいるの  
だが…どうするアキラ？」

何故かミノルは三軍に聞こえるように言っていた。

アキラ

「じゃあ僕は劉備軍中心に攻めるから…兄さん残り全部でどう？」

アキラも同様に同じ大きい声で言う。

ミノル

「ちよっと待て！？何で俺が曹操軍と孫策軍なんだよ！」

ミノルがアキラの言う事に反対し、指をさして言った。

そして…

ミノル

「シ水関の戦いで後方に下がった腰抜け曹操軍と孫策軍とやらなきやいけないんだよ！」

曹操軍、孫策軍

「……………なっ！！」「……………」

ミノルは突然、曹操軍と孫策軍を馬鹿にしたのだ。突然な事に驚く両軍。

ミノル

「俺が劉備軍を攻めるから…アキラ、お前が行けよ」

アキラ

「僕だって逃げる事しか脳がない連中と戦いたくないよ…」

追い討ちをかけるようにアキラも言った。

ミノル

「わかった、二人で劉備軍を攻めるってのはどうだ？」

アキラ

「それじゃあ残った曹操軍と孫策軍は？」

ミノル

「んなもん無視だ無視！」

アキラ

「それじゃあ攻めてきたら？」

ミノル

「どうせ二、三発殴ったら倒れる連中だよ…体力の無駄使いだ」

アキラ

「そうだね…無駄使いになるね。そもそも…相手になるのかもわからないし…」

ミノル

「そうだな…じゃあその作戦で行くか！題して『劉備軍から攻めよう、残りは空気の存在扱い大作戦！』に決定！」

どこからかラッパの音が聞こえてきそうな雰囲気と言ったミノル。しかも…

アキラ

「しかも兄さん知ってる？曹操軍って実は百合の集まりなんだって」

曹操軍

「……なっ！」「」

ミノル

「マジで！じゃあいつも夜中には女性だけの…あんな事とかこんな事とかするの！？」

アキラ

「男とは無縁ですね…もしかしたら一生百合で貫くとか？」

ミノル

「気持ち悪！寒気がしてきた…」

曹操軍の怒りが上昇した。さらに…

ミノル

「じゃあ孫策軍は？」

アキラ

「禪してる女の子がいるって話だよ？」

孫策軍

「……なっ！」「」

ミノル

「えっと…禪って、女の下着だっけ？」

アキラ

「いや…男が身につけるものですよね？」

ミノル

「だよな！もしかして見せ下着じゃねえのか？ほら！わざと男に見せ付けるってやつ」

アキラ

「あゝあれですね…しかも禪…」

ミノル

「じゃあ何か？孫策軍の人達って、禪をいつも常備してんの？決まってるの？その決まりあるの？わざと見せてるのか？女のチラッと見える秘部を…」

アキラ

「兄さん…これ以上言ったら…孫策軍の皆、恥かっちゃうよ？」

ミノル

「そうだな！」

二人

「あーははははは…」

孫策軍の怒りが増していった。

そして、二人の笑いが響き渡った。

劉備

「凄い暴言」

関羽

「何とも言えません…」

張飛

「ねえ？百合って何なのだ？」

趙雲

「うづむ…怖いもの知らずとはこのことか…」

翠

「あはは…(汗)」

あまりの行動に驚く劉備軍だった。

夏侯惇

「あの二人…許さん！華琳様！！」

曹操

「春蘭、秋蘭！貴方達は季衣、流琉、凧、真桜、沙和を連れてあの二人に私たちの力を見せ付けなさい！」

二人

「「御意！！」」

二人は怒りのオーラを出しながら行った。もちろん曹操も怒りのオーラを出していた。

一刀

「こ…怖い…」

その隣で震える一刀だった。

孫策

「無茶苦茶な言われようね…周瑜、もう出陣させた」

周瑜

「もうとっくにやっている…」

孫策

「蓮華も…」

周瑜

「怒りの形相で向かった」

孫策

「そう…『何か…誘われてる感じがするのは、気のせいかしら』」

孫策は心中そう思った。

アキラ

「動いたね…」

ミノル

「ああ…作戦どおりだ」

アキラ

「いいの…これで？兄さんが挑発した両軍相手にするなんて…」

ミノル

「別に構わないよ」

そう言って二人は後ろを向いて虎牢関を見た。

ミノル

「じゃあ…行くぜ！」

アキラ

「はい！」

そう言ってアキラは劉備軍に、ミノルは真っ直ぐ向かって行った。



## 第八章 介入 ～思惑～（後書き）

劉備軍対アキラ、曹操、孫策軍対ミノルの戦いが始まった。

劉備軍と戦うアキラ、劉備の願いと理想を聞いたアキラの反応は…

次回 『介入 ～理想～』

それは、願いと野望と同等のものである。

お楽しみに～

## 第九章 介入（理想）（前書き）

まさか私の好きな作者の作品が凍結しました。

それでも私は頑張って書こうと思います。

それでは！開演です！

## 第九章 介入（理想）

ミノルside

ミノル

「おらおらおら！」

「「「「「ギヤアアアアアアアアアア」」」」」

ミノルに向かって突貫してくる曹操軍の兵士達、だがミノルにとっては動的に等しく、全てなぎ倒している。

ミノル

『作戦通りだな…このまま孫策軍の兵士達も…』

そう思ったその時！

ブオツ！

ミノル

「むっ！」

大きな剣がミノルの前に振り下ろしてきたが、ミノルは回避した。

夏侯惇

「おい赤き戦人！私と勝負しろ」

ミノル

「おいおい…どんな挨拶の仕方だよ、礼儀の知らないお嬢さんだ…」

夏候惇

「黙れ！大人しく私に斬られる！！」

ミノル

「ええい！しつこい」

ミノルも剣で対抗し、鏝迫り合いになった。

だがミノルも意地を見せる。

ミノル

「こんなもんか？」

夏候惇

「何！？」

ミノルが強引に前に出て、彼女を押し倒した。

ミノル

『後はみぞを殴って気絶させる！』

ミノルが夏候惇に迫ったその時、

『ピュン』

ミノル

「あぶね！」

一本の矢がミノルに飛んできて、間一髪避けたミノル。

夏候淵

「姉者！大丈夫か？」

ショートヘアーで水色の髪色の女性が弓矢を持ってやって来た。

ミノル

『さあどうする俺、もしかしたらまだ来るなんて事が』

ミノルが思ったその時。

????

「おつりやあー！」

ミノルが上を見ると鉄球を持った少女が襲い掛かった。そしてその鉄球をミノルに向かって放り投げた。

ミノル

「なめるな！」

『ガキイイン』

????

「嘘！」

ミノルはその鉄球を剣で止めた。その事に鉄球を投げた少女は驚いた。

だが、

????

「これでどうです!」

ミノルの横から巨大なヨーヨーがミノルに向かってきた。

ミノル

「ええい!」

ミノルは力を出し、なんと鉄球を弾き返した。そしてヨーヨーも打ち返した。

ミノル

『クソ…こんな怪力娘がいるとなると少々厄介だな…』

夏候惇

「やるな…」

夏候淵

「赤き戦人の名は伊達ではないな…」

さらに彼女の後ろから三人がやって来た。

ミノル

『数が増えた、これなら作戦通りにいける。さて…今頃アイツは大丈夫かな?』

ミノル s i d e O U T

アキラ s i d e

アキラ

「はああああ！」

「「「「「どああああああ！」「」「」「」

劉備軍の兵士を倒しながら進んでいるアキラ。

アキラ

「兄さん、大丈夫かな？…！！」

そう思ったその時、アキラはバックして回避した。

アキラの前にいたのは…

関羽

「見事だな、白き戦人…」

張飛

「愛紗の一撃を避けるなんて凄いのだ！」

趙雲

「噂どおりですな…」

関羽、張飛、趙雲だった。

アキラ

「私の名はアキラ、董卓軍の将で、白き戦人でございます」

アキラは丁寧に挨拶した。

アキラ

「あなた方の名を聞かせてください」

関羽

「私の名は関羽！」

張飛

「鈴々は張飛なのだ！」

趙雲

「私は趙雲……」

三人はアキラに挨拶をした。

アキラ

「おや？劉備殿は？」

張飛

「何でお姉ちゃんなのだ？」

アキラ

「彼女：劉備殿にいくつかの質問がある」

関羽

「それは何故？」

アキラ

「理由が必要ですか？」

関羽

「ああ！聞かせてもらおう」

劉備

「いいよ愛紗ちゃん」

関羽

「桃香様……！」

馬に乗って、劉備が前に来た。

アキラ

「ではまず、董卓殿が悪政を働いて洛陽の民が苦しんでいると聞いて、この連合軍に入ったんですよ？」

劉備

「はい…袁紹さんからお誘いを受け、私達は参加しました」

アキラ

「それに疑問に思った事は？」

劉備

「少しありましたが…それは覚悟の上です！」

劉備は必死な思いで答えた。

アキラ

「なるほど…では次、あなたが目指している事は何ですか？」

劉備

「目指している事？」

アキラの言葉の意味が少し難しくなる劉備。

アキラ

「簡単に言えば、理想…夢かな？」

劉備

「それならあるよ!」

劉備はわかった様子で返事をした。

劉備

「私は、戦の無い平和な国を築く事です!」

アキラ

「.....」

劉備の言葉に無言のアキラ、そして彼の答えは…

アキラ

「無理だ…」

劉備

「えっ！」

アキラ

「君の理想、悪いけど…今の君では到底無理だ！」

アキラは真剣な表情で劉備に言い放った。

関羽

「貴様！桃香様の理想を侮辱するか！？」

関羽は青龍偃月刀をアキラに向けて言い返した。

アキラ

「では最後に聞く！」

アキラ

「君は人を殺す事が出来ますか？」

劉備

「!!!??」

アキラの衝撃的の言葉に驚く劉備。

アキラ

「その様子だと出来ないみたいですね…」

趙雲

「何故そんな事を聞く？」

アキラ

「戦に来たって事は敵を倒す、つまりあんたが言う悪者を殺すためにここに来ている、違いますか？」

劉備

「そ…それは董卓が…」

アキラ

「董卓が悪者だから死んでも仕方が無いとは言わせないぞ！」

劉備

「!!!!!!」

アキラ

「じゃあ何であなたは剣を持っているんですか？飾りなんですか？人一人殺せない奴は戦場に立つ資格は無い！」

劉備

「で…でも、私は困っている人を、洛陽の人達を助けたいんです！」

張飛

「そつなのだ！洛陽の人達を助けるために、鈴々達はきたのだ！」

アキラ

「活気があって、笑顔溢れる平和の洛陽を？」

劉備軍全員

「「「「えっ!!!」」」」

アキラの言葉に驚く劉備軍。

アキラ

「それに、あなた達が悪徳非道と言った董卓は、月は…洛陽の人たちを誰よりも好きで優しい子だ！

これ以上、あの子を悲しませようとするあなた達を許すわけにはいかない！」

そう言つてアキラは剣を構え、剣から発する雷が増大していた。

アキラ

「来るなら来い！峰打ちでも私は手加減はしない！」

そう言つてアキラは劉備軍に向かって行った。



第九章 介入 ～理想～（後書き）

矛盾だらけの戦い

ミノルの考えた作戦とは…

孫策軍の刃がミノルを襲う！

そしてその裏で暗躍する影が…

次回 『介入 ～乱戦～』

感想等ドンドンお待ちしています！

第十章 介入 ～乱戦～ (前書き)

Minosawaです。

少し手間取りました。

それでは、開演です！

## 第十章 介入 ～乱戦～

ミノル side

ミノル

「えっ…と…名前は？」

夏候惇

「私は夏候惇だ！覚えておけ！」

夏候淵

「…夏候淵だ」

ミノル

「ってことは妹さん？」

夏候淵

「そうだが？」

ミノル

「苦労するだろ…あんな姉貴だと」

夏候淵

「フツ…慣れている」

ミノル

「そっか」

夏候惇

「????」

ミノルがそう言うが、夏候惇は理解できなかった。

許緒

「ボクは許緒！よろしく」

典章

「私は典章と言います」

楽進

「私は楽進…以後お見知りおきを」

于禁

「私は于禁、よろしくなの」

李典

「ウチは李典や…って何で今頃自己紹介なんや？」

紹介を終えた李典が疑問に思い、ミノルに質問した。

ミノル

「いや…この戦が終わったら、また会うかもしれないから…顔と名前を覚えておこうかなと…」

夏候惇

「ふん！次は無い、何故なら貴様はここで死ぬのだ！！」

夏候惇の言葉を合図に、七人は一斉にミノルを向かって来た。

だがミノルはこれ待っていた。

ミノル

『よし！来た！』

そしてミノルの周りに数十本の炎の棒が出現した。

ミノル

「行け！」

ミノルの言葉を合図に数十本の半分の棒が七人の周りの地面に刺さった。

これに驚き、夏侯惇達は立ち止まった。

だが、その行動がミノルの本当の狙いだった。

ミノル

「かかったな！これで俺特製の『煉獄の檻』の完成だ！」

残りの棒が刺さっている棒と繋がり、その間からまた棒が細かく繋がった。完成したのはまるで檻のようなもので、夏侯惇達は閉じ込められた。

夏侯惇

「何だこれは！」

夏侯淵

「閉じ込められた！」

ミノル

「う」苦労さん…うまく引つかかってくれて」

ミノルはニヤニヤしながら笑っていた。

一刀

「何だあのデカイ檻みたいなの!!」

曹操

「やばいわね…」

それを本陣で見ていた一刀と曹操は驚いていた。曹操にとっては不味い事だ、何故ならほとんどの自分の将が閉じ込められている。つまり丸裸同然である。

李典

「何やこの檻!」

ミノル

「これは俺特製の火炎の檻だ!!」

ミノルは閉じ込められている曹操の配下に自慢げに言った。

夏侯惇

「くそ…季衣!」

許緒

「はい!てりやあー!」

許緒が鉄球を振り回して檻を壊そうとするが、

『ガゴーン!』

全くビクともしてなかった。

許緒

「ええ!」

典韋

「何ともない…」

ミノル

「無理無理…あんたらは俺の罠にはまったんだよ…」

曹操軍

「……………何!?!」

ミノルの一言に驚く曹操軍。

ミノル

「戦う前のあの挑発は、怒りを増幅させるため、当然怒りの矛先は俺とアキラに向けられる」

夏侯淵

「まさか…我らの怒りを利用したのか？」

ミノル

「その通り！いやーまさかあっけなく単純に引っかかるなんて…驚いたよ」

そう言っつてミノルは歩き出した。

夏侯惇

「貴様！まさか華琳さまを！」

夏侯惇の言葉に立ち止まるミノル。

ミノル

「お前らみたいな冷静さを失った馬鹿共の総大将倒しても時間の無駄だ、そこで頭でも冷やせ百合バカ娘共」

ミノルは冷たくそう言っつて孫策軍の方に向かって行った。

曹操

「初めてだわ…こんな、醜い想いで命拾いしたのは…」

曹操は唇をかみ締めて、くやしい思いだった。

一刀

「華琳…」

重い表情で華琳を見る一刀。

ミノル

「数が余りいない？」

孫策軍の兵の数が約50人余りしかいなかった。

ミノル

『どうやら孫策軍は容易ではないな…』

ミノルは心の中で疑問を感じた。

ミノル

「まあ…手っ取り早く行きますか！」

そして、ミノルは孫策軍に向かって走った。

アキラSide

激しくぶつかり合うアキラと関羽。

関羽

「何故望まない！？戦の無い平和な世界を作る事に納得しない」

そう言って関羽とアキラは鏖迫り合いになった。

アキラ

「確かに戦の無い平和な世界は確かに良いことだ…：そうなって欲しいと思う、けど…！それを成し遂げるために多くの犠牲が必要になってくる」

関羽

「それは覚悟の上だ！」

アキラ

「君達はそれでも民の覚悟はどうなんだ！」

張飛

「でも！それも含めて鈴々達はここにいるのだ！」

関羽が下がり、張飛がアキラに向かってきた。

張飛

「お姉ちゃんは国の事や子供達の事も考えてるのだ！」

アキラ

「それじゃ董卓も同じだ！洛陽の民の笑顔が好きの人だ！それなのに、何故悪く言われなければならない！」

アキラは張飛を退けたが、次は趙雲が向かってきた。

趙雲

「確かに我々は董卓という人物は詳しくは知らん……」

アキラ

「だったら……何で戦う……！」

一旦アキラが下がった。

アキラ

「劉備の……彼女の考えは矛盾している。あの考えは他の国々と戦って、犠牲を払って成し遂げるものだ」

関羽

「だからこそ我々は平和を望んで……」

アキラ

「それで平和になると、本当に思ってるのか!？」

そう言っアキラは関羽に猛攻撃してきた。関羽も少したじろいだ。

アキラ

「はっきり言う…彼女の…劉備の考えは、傲慢だよ!!」

関羽

「くっ!」

アキラ

「彼女の考えが正しいのなら…」

そう言っアキラは剣を地面に刺し、仁王立ちした。

アキラ

「俺を倒してみろ!」

アキラは劉備軍に向かって吼えた。

ミノル side

一方ミノルは孫策軍の兵士をほとんど倒していた。

ミノル

『うーん…何か変だ…まあ、いいか』

そう思っつてミノルは孫策のいる方に進んだ。

すると、

『ピュウ！』

ミノル

「！！！！」

突然ミノルの前に矢が飛んできた。だがミノルはそれを回避し、矢は地面に刺さった。ミノルは一旦剣を地面に刺して、矢が飛んできた方向を見た。

すると…

『ピュウ』

矢がまたミノルを狙って放たれたが、

『ガシツ！』

ミノルはその矢をタイミングよくキャッチした。

ミノル

「……」

『バキッ!』

ミノルは無言でその矢を折った。

すると…

ミノル

「!」

ミノルは素早く地面に刺した剣を抜き、後ろを向いた。そこにはミノルを背後から剣で狙っていた二人の少女がいた。

甘寧・周泰

「赤き戦人、覚悟!」

ミノル

「チイ!」

二人の攻撃を避けるミノルだが、

孫権

「ハアアア!」

そこには剣を構えた孫権がミノルに襲ってきた。

ミノル

「クソツッ！」

ミノルは剣で対抗し、孫権の剣を弾かせた。

ミノル

「おいおい…俺が相手をする奴は挨拶も出来ないのかよ…」

孫権

「黙れ！暴虐董卓の将が！」

鏝迫り合いの中、ミノルがそう言うが、董卓の罵声を言った。

ミノル

「その程度か…」

その言葉に少し頭にきたミノルは少しキレた口調で言った。

するとミノルは少し本気を出し、孫権を押ししていた。

そして、

ミノル

「おら！」

孫権

「キャ！」

ミノルは孫権を押し返した。

孫権

「だが、もう一度…！」

目の前にいたミノルがいなかった。

孫権

「はっ…！！！」

孫権は横を向いた。そこには既にミノルが剣を構えていて、切りかかっていた。

孫権

『速い！？斬られる』

孫権が目を閉じ、斬られると思った。

だが…

『カキン…！！』

孫権は恐る恐る目を開けた。何ともない、痛くもない…

何故なら…ミノルが斬ったのは孫権の剣だった。

その剣は真ん中から真っ二つになっていて、剣先は地面に落ちていた。

ミノル

「……………」

ミノルは無言で歩き出した。

甘寧

「蓮華様!!」

周泰

「…無事ですか!?!」

ミノルを背後から襲ってきた二人が孫権のもとにやって来た。

孫権

「何故殺さない、情けのつもりか?」

ミノル

「別に、意味無く人を殺したくないんでね」

そう言ってミノルは孫策のほうに向かって歩くが、

孫策

「私をお呼びのようね?」

馬に乗っている孫策と周瑜、その隣に弓矢を持っている黄蓋がミノルの前に現れた。

ミノル

「ああ…俺は袁紹にお仕置きしたいから…通してくれないかな?」

ミノルは笑顔で孫策に言った。

すると孫策は、

孫策

「いいわよ？」

孫策軍

「『『『『『なっ！！？』』』』』」

ミノル

「えっ！？」

孫策以外の人間とミノルは孫策の言葉に驚いた。

黄蓋

「策殿：どついう理由で？」

孫策

「袁紹をお仕置きしに来たんでしょう？ならいいわよ」

ミノル

「本当にいいのか？」

孫策

「ええ：ただし」

ミノル

「????？」

孫策

「私と隣にいる周瑜以外の将を倒すこと、もう一つは必ず袁紹を懲らしめる事、それらの事を一つでも守れなかったら…」

ミノル

「守れなかったら？」

ミノルは息を呑んだ。

孫策

「我が孫呉に来る事よ！」

孫策・周瑜以外の将

「「「「「なっ!!!?」「」「」「」

ミノル

「嘘!？」

ミノルだけでなく、孫策・周瑜以外の孫策軍の将も驚いた。

孫権

「姉様!どうして!？」

孫策

「これは冥琳と決めた事よ、赤き戦人は今後の孫呉の繁栄に協力してもらう必要があるってね…」

孫権

「……………」

孫策の言葉に黙る孫権。

ミノル

「ハーツハツハ…」

ミノルは突然笑いだした。

ミノル

「その案、悪くないな」

ミノルの返事はOKだった。

ミノル

「それにあんた、意外と冷静だな？弟と一緒に馬鹿にしたのに」

孫策

「あれ…芝居でしょ？」

ミノル

「あっ！気づいてた？」

孫策

「薄々気づいたわ」

孫策は少し笑いながら言った。するとミノルはまた笑い出した。

ミノル

「いやーあんた最高だよ！気に入ったよ！」

そう言ってミノルは剣を構えた。

ミノル

「…けど今は敵同士、悪いけど…急いでるからな…」

そう言ってミノルは後ろに振り向いた。

ミノル

「始めるか、俺の炎の祭りを……」

洛陽

于吉

「どつやら…今が好機ですね…」

洛陽の城下町に二人の男が歩いていた。

左慈

「よし…計画通りにいくぞ！」

「oooooooooooooooooooooooooooo」

そして引き連れていた全身を白を強調した服装の軍団に指示をする。  
そして白装人は姿を消した。

左慈

「この『外史』に紛れ込んだ北郷一刀、そして紛れ込んだ四人も、

始末してやる」

だがまだ知らない、あの二人の、あの兄弟の実力を…

## 第十章 介入 ～乱戦～（後書き）

ついに動き出す暗躍者達

袁紹の配下の二人が動き出し、さらに激しくなる戦い。

そしてある者の行動が、ミノルの…魔王の逆鱗に触れる！

次回 『介入 ～怒りの鎖～』

その鎖を解いた時、真の恐怖を英傑達は知る事になる。

## 第十一章 介入く怒りの鎖く

ミノルside

ミノル

『しかし、あの二人は動きが速い…となると、援護射撃する弓矢の女を…』

ミノルは黄蓋の方を振り向こうとした、その時！

『ピュピュウ！！』

ミノル

「何！？」

ミノルは黄蓋を見て驚いた。黄蓋が一度に二本の矢を同時に放った。

ミノル

「クソ！」

ミノルは二本の矢を切り落とした。

周泰

「タアアアア！」

ミノル

「くっ！」

周泰はアキラと同じくくらいの長さの太刀でミノルを襲うが、ミノルは負けじと剣で止め、鏢迫り合いになった。

ミノル

「可愛い顔して、中々やるね、お嬢ちゃん？」

周泰

「私は周泰という名があります！お嬢ちゃんではありません」

ミノル

「これは失敬……」

甘寧

「余裕のつもりか……！」

ミノルの後ろから甘寧が襲ってきた。

ミノル

「挟み撃ちのつもりか？だが……！」

ミノルは周泰から離れて甘寧の攻撃を防いだ。

甘寧

「ハア！」

ミノル

「せいや……！」

甘寧がミノルに右の蹴りで当てようとすると、ミノルも右足の蹴りで当て返した。

ミノル

「っ!!！」

するとミノルが顔を赤くしながら、一旦下がった。

ミノル

「あんた…一つ聞いていいか？」

甘寧

「何だ？」

ミノル

「さっき俺とアキラがあんたらの悪口を言ったよな？」

甘寧

「ああ!!それがどうした？」

ミノル

「まさか…噂が本当だったとは…」

ミノルは顔を背きながら指をさしながら言った。その指がさしているのは、甘寧の下半身だった。

ミノル

「……見えた」

甘寧

「何をだ？」

ミノル

「禪が見えたんだよ！白い禪が！！」

ミノルが顔を赤くしながら甘寧に向かって言った。

『ズドーーーーー！』

甘寧以外の孫策軍がミノルの発言で転んだ。

孫策

「以外にそう言うのには弱いよね…でも案外かわいいかも？」

周瑜

「こんな状況でよく言えるな…」

孫策の言葉に呆れる周瑜

甘寧

「それがどうした？」

ミノル

「へっ？」

甘寧

「禪が見えた、それがどうした？」

甘寧は表情一つも変えずに言い返した。

ミノル

「えーーーーー!?!」

ミノルは驚愕し、驚きを隠せない。

ミノル

「普通は見せないだろ!しかも禪って…あんな女だろ!?!」

甘寧

「女だから白禪つけては駄目だという根拠が無い。それに動きやすいし、見られても恥ずかしくならない、禪というのは素晴らしい下着だ!」

ミノル

「何禪について熱く語ってんだ!カッコよくねえよ!」鈴の甘寧『

じゃなくって『禪の甘寧』に変えろ！」

甘寧

「貴様！私の鈴を侮辱するか！」

ミノル

「禪について熱く語るお前に説得力ねえよ！」

周泰

「あゝ」

ミノル

「何だ！」

ミノルは半ギレ状態で周泰の方を振り向いた。

周泰

「私も…禪なんです!!！」

そう言って周泰は顔を真っ赤にして自分が身に着けている禪をミノルに見せた。

ミノル

「ここにもいた……!?!」

ミノルは周泰の禪を見て驚き、叫んだ。

ミノル

「何で君みたいなた純粋な女の子が禪を履いてんだよ! って言うか恥ずかしいなら見せなくてもいいから!」

周泰

「甘寧様が、禪は素晴らしい履き物だから常備履き続ける! そして女の感情はほとんど出すなって……」

ミノル

「お前! 自分の変な性格と趣味を相手に押し付けるのか! ただの変態じゃねえか!」

甘寧

「誰が変態だ!」

ミノル

「はっ！！まさか…」

そう言っつてミノルは孫策達の方を見る。

孫策

「ちよつと！何見てるのよ!？」

ミノル

「いや…もしかしてあんたらも…禪?」

孫策

「私は禪じゃないし、変態でもないわ!私は毎日勝負下着を常備着用してるわ!」

ミノル

「それを異性の俺に胸張って自慢げに言うアンタも変態だ!!!」

孫策の爆弾発言につっ込むミノル。

周瑜

「私は普通のだ…」

黄蓋

「儂もだ…」

孫権

「私も禪なんて…」

甘寧

「実は蓮華様専用の紅白禪をご用意してますぞ!」

甘寧はどこから出したのか、両手に紅白の禪を持っていた。

孫権

「あなた！どこからそんな物用意してるのよ！？」

ミノル

「自分の主君に禪勧める奴がいるか！馬鹿なのか、お前は馬鹿なのか！？」

二人は盛大に甘寧につっ込んだ。

そして…

『ボツ！！』

突然甘寧が持っていた紅白の禪が燃えていた。

甘寧

「ああ！蓮華様専用の紅白禪が！」

そして二つの禪は燃え尽き、灰になった。

ミノル

「いい加減、禪如きで嘆くな変態娘、二度と禪が履けない様にしてやろうか、ああ？」

そう、甘寧が持っていた紅白禪を燃やしたのはキレたミノルだった。ミノルは自分の剣から炎を飛ばし、禪を燃やしたのだ。



楽進・李典・于禁

「助かった」

ミノルの煉獄の檻に閉じ込められていた曹操軍が檻を破壊して脱出していた。

ミノル

『しまった…無駄話して時間がかかって煉獄の檻の魔力が弱くなつて、脆くなったのか』

ミノルは心中悔しがっていた。

ミノル

『俺の…ミスだ！』

袁紹 side

袁紹

「何を手間取ってますの！早く虎牢関を落とさない！」

「しかし、赤き戦人と白き戦人の力を見て、半数近い兵達が逃げ  
しまつて…」

袁紹

「キイ〜！文醜さん、顔良さん」

文醜

「何ですか？姫」

顔良

「お呼びですか〜」

ミノルの剣より倍近い大きさの剣を持った少女とハンマーに近い武器を持った少女が袁紹のもとにやって来た。

袁紹

「あなた方は残りの兵達を集めてここを突破してください」

文醜

「本気ですか!?!」

顔良

「赤き戦人と白き戦人がいるじゃないですか？」

二人は驚きながら言い返した。

袁紹

「大丈夫ですわ！劉備さんと華琳さんと孫策さん達があの二人を抑えてますわ！一気に攻める時ですわ！」

胸を張って命令を出す袁紹だが、『本当に大丈夫か？』的な顔で袁紹を見る二人。

袁紹

「いいからお行きなさい！！！」

二人

「は、はい」

二人はそう言って、袁紹のもとから離れた。

アキラ side

アキラ

「兄さんの作戦が失敗！？マズいな……」

アキラは兄の作戦が失敗したと察し、心中マズイと思った。

趙雲

「曹操軍の士気が戻ったようだな…お主の兄は苦しい状況を見た」

アキラ

「チイ！」

アキラはミノルがいる方向に向かおうとするが、

関羽

「どこへ行く！」

アキラ

「クソ！」

その方向には関羽が立っていて、鏝迫り合いになる。

アキラ

『兄さん…』

ミノル s i d e

ミノルは曹操軍と孫策軍の猛攻に苦しんでいた。

ミノル

『クソツ！前に行くどころか逆に後ろに下がってきやがった』

猛攻に耐えながらミノルは心中思った。

すると…

『『『『『『…オオオオオオ』』』』』』

ミノル

『雄叫び？まさか！！』

ミノルは袁紹軍の方を見ると、

文醜

「一気に行くぞ！」

『『『『『オオオオオオ』』』』』』

袁紹軍がど真ん中、中央に進軍してきた。

ミノル

「何、進軍だと！」

ミノルは驚きを隠せなかった。

ミノル

「やむを得ない、合図を…」

ミノルは虎牢関にいる呂布達に合図を出そうとしたその時！

夏侯惇

「もらった！」

ミノル

「何！？」

ミノルの一瞬の間隙を逃さない夏侯惇はミノルに向かって斬って来た。

ミノルは辛うじて避けたが、バランスを崩し、転倒した。

ミノル

「クソ…はっ！！」

ミノルは慌てて首をさすった。

無い。

詠から貰った御守りが無い。

夏侯淵

「ん、何だ？」

夏侯淵は地面に落ちていた物を拾った。

それは、ミノルが詠から貰った御守りだった。

ミノル

「おい！それを返せ！！それは、董卓軍にいる奴から貰った大切な

物だ！その薄汚い手で触るな！」

ミノルは大声で夏候惇達に向かって叫んだ。

夏候惇

「ふん！我らを訳のわからん物に閉じ込めた罰だ！こんな物はこつしてやる！」

そう言つて夏候惇はミノルのお守りを…

バラバラに斬つた。

ミノル

「!?!?!?!」

ミノルは詠から貰つたお守りの無惨な姿を見て愕然した。

夏候惇

「いいか赤き戦人！貴様も悪徳非道の董卓はこの地で討ち取られるのだ！」

夏候惇が大声でミノルに向かって叫んだ。

ミノル

「……………」

夏候惇

「秋蘭！殺れ！」

夏候淵

「わかった……」

そう言つて夏候淵は弓を構え、矢を放つた。

だが……

ミノル

「お前ら……………」

『ボオオオオオオオン』

ミノルの周りから赤いオーラが発生し、夏候淵が放つた矢はそのオーラに包まれて力をなくし、地面に落ちた。

ミノル

「俺を怒らせたんだ……覚悟は出来ているだろうか!?」

怒りの魔王、虎牢関に降臨した。

## 第十一章 介入 〱 怒りの鎖 〱 (後書き)

激怒した魔王ミノル。

その恐怖も束の間、彼の力に連合軍崩壊の危機!?

果たして、ミノルを止めることができるのか?

そして、左慈達がシーナとコーウェン、月達を襲う!

次回、 〱 介入 〱 崩壊と襲撃 〱

魔王の怒りは人の身体も、精神こころの全てを破壊する。

## 第十二章 介入と崩壊と襲撃（前書き）

久しぶりに更新しました。もうすぐ年明けですね。それではどうぞ

## 第十二章 介入と崩壊と襲撃

アキラ side

アキラ

「この気、兄さん……とうとう」

アキラはミノルの凄まじい気を感じた。

アキラ

『もしかしたら、マズイ事になるかも……』

心中、不安を感じたアキラであった。

シーナ・コーウェン

「！！！！！！」

凄まじい気を感じ、驚くシーナとコーウェン

月

「お二人共、どうかしましたか？」

驚いた二人を見て、月が心配そうに聞いた。

コーウェン

「ええ…大丈夫です」

シーナ

「心配かけてすみません…」

二人は平気な顔で返答した。

ミノル side

曹操軍と孫策軍と劉備軍の将達は驚いていた。さっきまでのミノルとは違い、殺気を身に纏っている。

ミノル

「アキラ!!」

ミノルが突然大声でアキラを呼んだ。

ミノル

「お前は進軍している袁紹軍を叩け!!」

アキラ

「兄さんは!?!」

驚いた様子で聞くアキラ。

ミノル

「俺はこいつらを、全員…叩き潰す!!」

劉備軍・曹操軍・孫策軍

「……………なっ!」

三軍の将達、そしてアキラも驚いた。

アキラ

「正気! 兄さん」

ミノル

「反論は許さん! さっさと行け!」

アキラ

「でも、兄さん!」

ミノル

「二度も言わせるな! 袁紹軍を止めるだけでいい、どんな手を使ってもだ!」

アキラ

「……わかった」

ミノルの気迫と威圧に押され、アキラは苦い思いで承諾した。

アキラ

「という訳です!」

そう言ってアキラは関羽達の前に雷を落とした。

関羽

「何!?!」

張飛

「眩しいのだ〜」

趙雲

「目晦ましか!?!」

あまりの眩しさ関羽達は一瞬目を閉じた。開けた時にはアキラの姿が無かった。

趙雲

「今なら…虎牢関を攻める事が出来る!」

張飛

「突撃なのだ!」

張飛達が虎牢関に近づこうとした

その時。

ミノル

「何勝手に行こうとしてんだ!」

『ブオオオオン!!!』

突如、炎が関羽達の前に地に走り、地面が削られていた。

ミノル

「俺の許可無しに、勝手に通るなんていい度胸だな?」

すると関羽達のもとに曹操軍と孫策軍の将達が集まった。

関羽

「お…お前達」

夏侯惇

「こいつを倒して董卓を討つぞ！」

黄蓋

「援護は任せい」

乙女達は自分達の武器を構え始めた。

ミノル

「さあ、相手は三国の猛将！例え乙女でも、負けはしない！」

ミノルは武器を構えた。

ミノル

「天の遣い、赤き戦人ミノル…推して参る！」

アキラ side

一方アキラは進軍している袁紹軍の前に立っていた。

「文醜様！顔良様！前方に白き戦人が…」

文醜

「何だつて！」

顔良

「いつの間に!?!」

気づいた時にはもう既に遅かった。

アキラが剣を持ち直し、呪文を唱えていた。

アキラ

「我が剣に宿る雷よ、我が前に立ちはだかる愚か者達に制裁の雷を  
解き放たん！雷の波よ敵を飲め！雷轟連波！！」

アキラが地面に大きな切れ込みを入れた。すると大きな雷で出来た  
大波が次々に進軍している文醜と顔良達に迫ってきた。

「うわー！雷が近づいて来る！」

「妖術だ！逃げろー」

逃げても手遅れ、波は襲いかかり、感電して気を失った兵達が続々と出ている。

文醜

「斗詩このままじゃあ…」

顔良

「後退！後退！」

文醜と顔良達は後退する他が無く、後退を余儀なくされた。

アキラ

「これですばらくは進軍できなくなるだろう…後は…」

アキラは兄、ミノルがいる方を見た。

ミノルside

ミノル

「こんなもんか！オラ！」

関羽

「くっ！」

ミノルは関羽に対して猛攻していた。

甘寧

「関羽！助太刀する」

そう言つて関羽の助太刀に参つた甘寧と周泰

周泰

「覚悟！」

ミノル

「二度も同じ手は効かねえ！」

そう言つてミノルは二人を力強く剣で押し返した。

張飛

「たああああ！！」

許緒

「てああああ！！」

典章

「はああああ！！」

ミノルの前方に張飛、許緒、典章の三人が襲つてきた。

ミノル

えんがせん  
「炎牙閃！」

ミノルは大きく剣を横に振り、三人の武器を弾き飛ばし、三人はその反動で吹き飛んだ。

だが、

夏侯淵

「行けるか？」

黄蓋

「当てる！！」

ミノルの前に二本の矢が飛んできた。

ミノル

「クソツタレ！」

ミノルは二本の矢を斬った。そして矢が灰になった。

楽進

「くらえ！」

楽進は手に気を溜めて、ミノルに向かって気弾を放った。

ミノルは顔面にクリーンヒットした。

楽進

「よし！どうだ」

楽進は勝ったと思った。しかし…

ミノル

「……………」

ミノルはまるで何も無かった感じで立っていた。もちろん無傷だった。

楽進

「馬鹿な！」

李典

「凧の気弾をくらって何とも無いって…ありえへん！」

于禁

「これが赤き戦人のちからなの〜!?!」

三人はミノルに驚いた。

ミノル

「気弾ってというのは…」

そう言つてミノルは左手を楽進に向けた。するとミノルの左手からどンドン気が膨れていき、いつの間にか楽進の気弾より大きくなつていた。

ミノル

「こつ撃つんだよ!」

そう言つてミノルは気弾を楽進に向けて放つた。

楽進

「なっ!?!クソっ!」

楽進は辛うじて避けた。気弾は岩に当たつた。その岩は木っ端微塵になつた。

楽進はそれを見て驚き、落胆した。

ミノル

「さて…次…!?!」

ミノルがそう言いかけた時、ミノルの前に趙雲が襲い掛かつてきた。

趙雲

「我が槍さばき、とくと味わえ！」

そう言つて趙雲が自慢の槍さばきで攻撃するが、ミノルが紙一重で避け続けた。

ミノル

「お遊戯か？ だつたら！」

避けながらミノルは趙雲の僅かな隙を逃さず、

ミノル

「よそでやりやがれ！」

ミノルは趙雲の脇腹を蹴った。

趙雲

「クツ！」

趙雲は脇腹を蹴られながらも、立ち止まった。

夏侯惇

「赤き戦人！ このわたしと戦え！」

ミノルの背後から夏侯惇が剣で襲い掛かった。ミノルは声が出た方を振り向いた。

ミノル

「てめえは… あん時の…」

ミノルは思い出していた。

自分の目の前で詠から貰った御守りをを無惨に切り刻んだ拳句、月と詠の暴言を吐き捨てた女。

ミノル

「てめえは！」

ミノルは振り下ろした夏候惇の剣を自身の剣で止め、鏢迫り合いになった。

ミノル

「よくも俺の大切な御守りをやってくれたな！」

夏候惇

「ふん！あんな小物如きで怒っているのか？」

ミノル

「そりゃあ怒るさ！てめえみたいな馬鹿な女は特になー！」

徐々にミノルが押しはじめてきた。

夏候惇

「負けてたまるか…貴様には！」

ミノル

「なら！さっさと！」

ミノルはそう言って夏候惇を強引に攻めようとしたその時！

『ザクッ!』

ミノル

「っ!」

ミノルの動きが突然止まった。何故なら…ミノルの右足に矢が刺さっていた。

夏候淵

「姉者!今だ!!!」

ミノルの右足に矢を当てたのは、夏候淵だった。

夏候惇

「赤き戦人、覚悟!」

ミノル

『マズイ!』

ミノルはその時、時間が止まった感覚だった。そして詠に放った言葉を思い出した。

「かならず…帰って来るからな…」

ミノル

「俺は！負ける訳にはいかねんだよー！ー！」

叫んだミノルは間一髪夏候惇の攻撃を避けて、右足に刺さっている矢を抜いた。

ミノル

「うぐっ！」

抜いた痛みか、ミノルは苦痛な顔をしたが、なんとか耐えた。

そしてその矢を夏候惇に向けて投げた。

だがその矢が刺さった場所は…

夏候惇

「！！！！！！！！」

夏候惇の左目だった…

夏候惇

「がああああああ！！！！」

激しい痛み<sup>に</sup>に叫ぶ夏候惇。

夏候淵

「姉者—————！」

姉の姿を見て驚愕する夏候淵。

曹操

「春蘭！」

それを見た曹操は驚いた様子で叫んだ。

一刀

「クソ！」

一刀は馬を降りて、剣を持って夏候惇のもとへ行った。

曹操

「一刀！」

ミノル

「お前は言ったな…ここが俺の死に場所だと…ここがお前の…」

ミノルは言葉を失った。何故なら夏候惇は刺さった左目を抜き、自分で喰らったのだ。

夏候惇

「まだ…だ…私は…まだ…」

だが…かなりの痛みか、剣を置いて膝をついてしまおう夏候惇。

ミノル

「最後の抵抗もむなしくか…楽にしてやる…」

そう言つてミノルは剣を構えたその時。

ミノル

「……！」

夏候惇の前に北郷一刀が剣を構えて立っていた。

ミノル

「何のつもりだ？」

一刀

「もう彼女は戦えない、それにアンタ、赤き戦人で盗賊とかやっつけてんだろ？董卓は悪者で洛陽で悪政を…」

一刀の言葉にミノルはブチキレた。

ミノル

「ふざけんな！何も知らない馬鹿野郎が！悪政？董卓は悪者？そんな噂に集まった馬鹿共がぬかしてんじゃねえ！」

ミノルの剣幕に少し身を引く一刀。

すると夏候惇が一刀の足を掴んだ。

夏候惇

「北郷…逃げる…」

朦朧とする意識で一刀に言う夏候惇。しかし…一刀は、

一刀

「断る…」

一刀は夏候惇の言葉に反論した。

夏候惇

「お前だけでも！」

一刀

「お前は曹操の、華琳の自慢の部下だろ！こんなところで命を投げ

出すんじゃないねえ!!」

夏候惇

「!!!!」

夏候惇は一刀の一言に驚いた。

ミノル

「いい事を言うもんだ…しかしそんな綺麗ごとは戦場にとっては苦痛の絶叫と変わらん」

そう言っつてミノルは剣を構え、一刀に向かって行こうとしたその時、前からミノルにとって見慣れた剣と男が止めた。

ミノル

「何のつもりだ？アキラ」

怒りの形相で睨むミノル。

アキラ

「兄さん…ここまです…後は本隊が…」

冷たい目でミノルを睨むアキラ。

ミノル

「このガキを倒して、この女を殺してから戻る」

アキラ

「それは僕が許さない」

ミノル

「敵を庇うのか？あの子を…董卓を何も知らずに侮辱し、詠から貰ったお守りをその女が持っている薄汚い剣でバラバラにされて、黙って生かすのか！」

アキラ

「……」

ミノルの言葉に無言のアキラ。

ミノル

「そこを退け、アキラ」

アキラ

「いやだ…」

ミノル

「退けと言っている！でないとしてめえごとぶっ飛ばすぞ！」

物凄い威圧で周りが一瞬固まった。

アキラ

「兄さん！忘れたの、戦う前に誓ったあの約束を…傷つけるのはしかたないけど、殺しはダメだって！殺したらあの子の…董卓の存在がますます危険な存在になる」

ミノル

「！！！」

アキラ

「それよりも今の自分の顔を見て！完全に怒りに身を任せ、暴れる自分の姿を、月ちゃんと詠ちゃんがどんな思いをする！自分達がいるから兄さんは人殺しをしてしまった、それを聞いたら二人が涙を流す

。兄さん言ったよね！あの二人には笑って欲しい、泣かせる訳にはいかないって！！」

ミノル

「！！！！」

ミノルは自分の剣で自分の顔を見た。そこに映っていたのは詠たちを守る自分の顔ではなく、怒りで我を忘れかけていた自分の顔だった。

ミノル

「俺は…俺は…」

そう言ってミノルは腕を下ろした。

ミノル

「クソー！！」

ミノルは誰もいない岩に炎を纏った剣をおもいつきり振り下ろした。

岩はもう原形が残らないくらい粉々になっていた。

もしもアキラが止めていなかったら、あの二人はおるか他の将たちも巻き込んでいただろう。

アキラ

「兄さん、合図を」

ミノル

「・・・わかった」

そうやってミノルはポケットから紫色の小型のボールを取り出し、  
落とした。

するとボールから紫色も煙が出てきた。

張遼

「出たで！二人からの合図や！」

呂布

「・・・門を開けて」

華雄

「行くぞ！」

「「「「「「「「「「おー……………！」「」「」「」「」

「袁紹様！大変です」

袁紹

「どうしました？虎牢関を落としましたか？」

「いえ！門が開き董卓軍の本隊が進軍を開始しました。」

袁紹

「何ですって顔良さん達は何やってますの!？」

「それが、白き戦人の妖術で進軍できず、さらには前線の三軍の士気が低下!このままでは…!」

袁紹

「ならば全ての兵達で迎え撃ちなさい!」

袁紹は慌てていた様子で兵士に怒鳴った。

一方ミノルとアキラは一旦月たちがいる場所に向かって歩いていった。

アキラ

「落ち着いた？兄さん」

ミノル

「ああ…アキラ、ありがとな」

アキラ

「えっ？」

ミノル

「お前がいなかったら俺は…」

アキラ

「いいんだよ…兄さん」

ミノル

「お前は凄いや…それに比べて俺は詠から貰った御守りを簡単に消されて、腹が立って人を殺そうとした。馬鹿だよ…俺は」

ミノルはそんな自分を責めていた。

アキラ

「兄さん…」

心配する様子のアキラ。

ミノル・アキラ

「「！！」」

二人は足を止め、剣を取り、構えた。

二人の前に白装束を着た奴らが突然と姿を表した。

ミノル

「こいつら…一体」

アキラ

「何なんだ？」

コーウエン

「馬車に荷物を全て置きました」

シーナ

「大体は終わったわね」

詠

「行こう！月」

月

「うん…」

何故か様子に変な月。

コーウエン

「どうかしましたか？」

月

「あのう…実は」

つきが何かを言おうとしたその時！

コーウエン・シーナ

「「！！！！」」

二人は何かに気がつき、月と詠を守るように固まった。すると彼らの周りに白装束の奴らが現れた。

コーウエン

「これは…一体…」

月  
「は……」

月は白装束の人間達を見て怯えていた。

???

「ここで天の遣いとその子娘はここで死んでもらう！」

白装束の奴らのリーダーらしき男が現れ、月に向かって飛び蹴りし  
ようとしたその時。

シーナ

「はっ！！」

シーナは男の飛び蹴りを蹴り返した。

???

「何！？俺の蹴りを蹴り返した？」

シーナ

「名前も名乗らずに暴力を振るうなんて男としてどうかしら？」

???

「何！？」

シーナ

「私はシーナ、こっちは旦那のコーウェン」

左慈

「俺の名は左慈、外史を変える存在、天の遣いを抹殺する者だ」

コーウエン

「天の遣いの抹殺？」

左慈の言葉に疑問を感じたコーウエン。

左慈

「貴様らには関係ない！行け！！」

「「「「「おおおー」「」「」」」」

白装束の人達が4人に向かって襲い掛かってきた。

しかし…

シーナ

「封水…」

コーウエン

「封風…」

二人

「「解放！！」「」

ギヤアアアアアア！

白装束の人達の半分が吹っ飛んだ。

左慈

「何！？これは…」

左慈は二人を見て驚いた。

コーウエン

「シーナ、雑魚は私が…」

シーナ

「ええ、私は…」

そう言っつてシーナは左慈の前に立った。

シーナ

「来なさい…相手してあげるわ」

左慈

「ふん！女だからと言って手加減はしないぞ！」

シーナ

「いいわよ…遊んであげるわ、坊や…」

シーナはそう言っつて妖しい笑みをした。



## 第十二章 介入 ～崩壊と襲撃～（後書き）

シーナvs左慈、そしてミノルとアキラは間に合うのか？

そしてこの戦いの真実とは？

虎牢関の戦いが終焉を迎える。

次回 『介入 ～真実という名の終焉～』 次回の更新は年明けです。

感想等お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0371x/>

---

真・恋姫†無双 英傑達と二人の魔王

2011年12月31日01時47分発行